

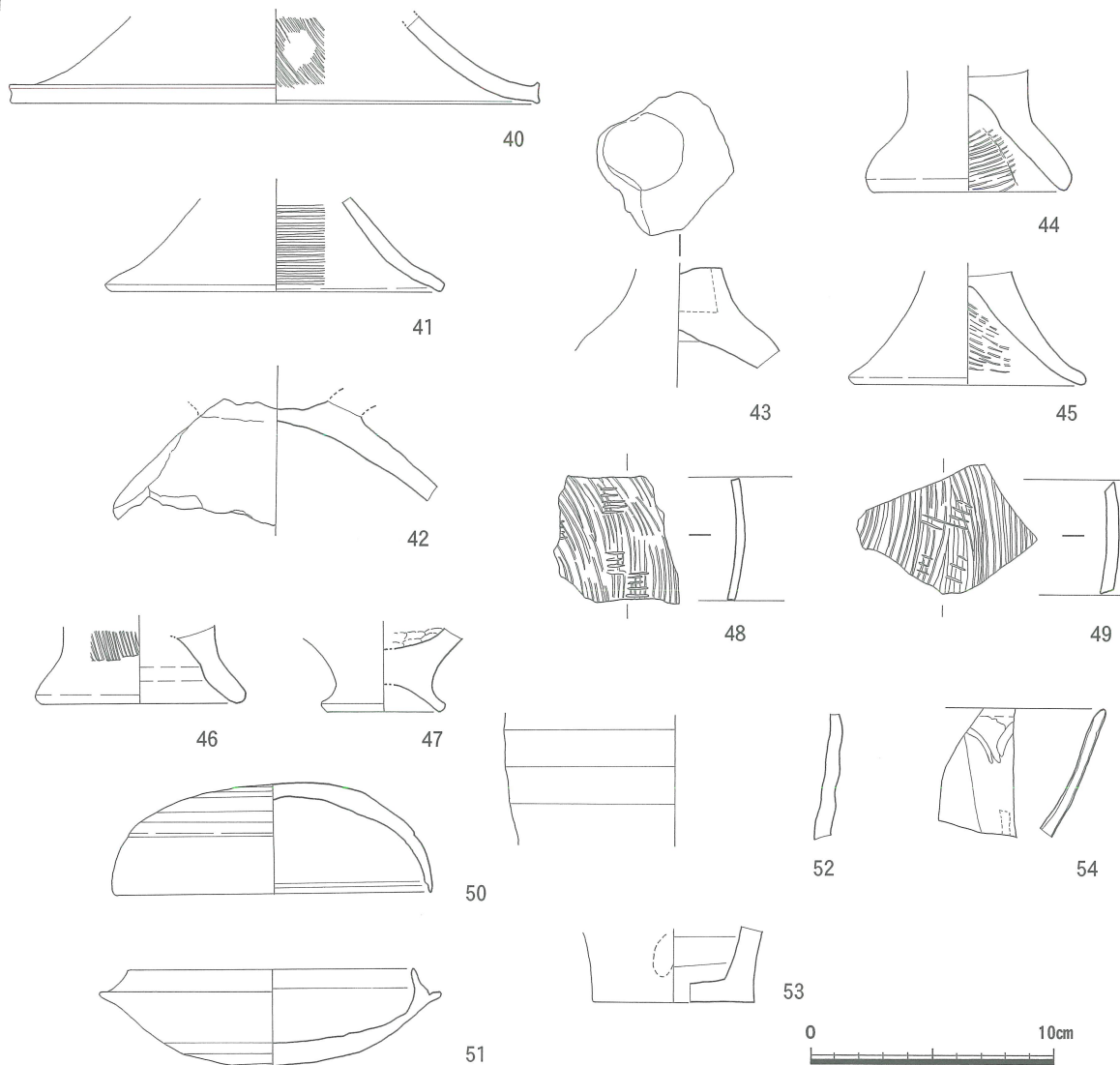
部は回転ヘラケズリで仕上げている。ロクロの回転は時計回りである。外面全体に灰を被っている。

陶質系土器（第18図52・53、図版16-1）

52は陶質系土器と思われ、内外面に緩やかな水挽き痕を残す。器壁は5mmと均一である。色調は褐灰色で、割れ口は浅黄色である。胎土は水簸・精製された粘土を使用し不純物を含んでいない。焼成は良好であるが、やや軟質の感じを受ける。この資料は2号竪穴住居跡内の灰混じり土壌から出土したものである。同様の資料53は底部資料で径6.8cmを測る。ロクロの回転方向は不明であるが、底部外面に回転痕と体部内面に水挽き痕を留めている。底部は厚さ9mm、体部は1cm程を測る。色調・胎土・焼成は同じであるが、径に大きな違いがあり別個体と思われる。外に3片検出しているが、全て同一遺構内である。底部1点、体部2点である。また、柱穴66からも52とは直接接合しないが同種の破片が出土している。

青磁（第18図54、図版16-1）

54は体部から内湾する口縁部の資料である。蓮弁は片ヘラ切りで緩やかな弧状に削り出し、



第18図 2号竪穴住居跡出土土器実測図（40～54）（S-1/3）

次に間弁を剣先部が合わさるように「ハ」の字状に削るものと思われる。その後蓮弁と間弁と口縁部の三角形の高まり部分を扇型に削って終了している。蓮弁の鑄部分の作り出し部分は鮮明である。この陽刻を行った後釉薬を掛けて焼成している。釉薬は厚いところで0.8mm程を測る。釉薬中には気泡を混じ、焼成によって小孔を生じている。

銅 鏡 (第19図1、図版16-2)

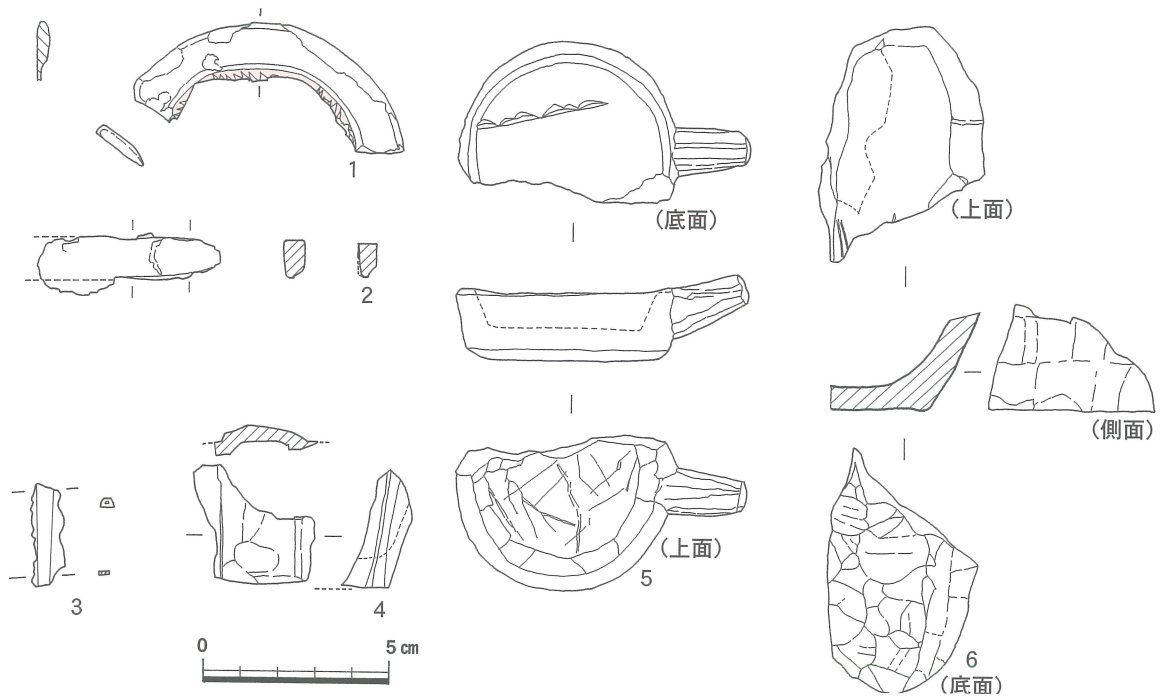
竪穴住居跡周壁の上場近くから出土した。面径8cmで1cmの平縁を有する。厚さは平縁部で3mm、内区は0.5mmである。内区の大部分を欠損しているが、外区内縁に一部外向の鋸歯文を確認できる。この部分には赤色顔料(ベンガラ)を厚く塗布している。この鏡は故意に割られており、内区部分の破断面は鋭利である。しかし、平縁の一方の割れ口は手ズレにより磨耗しており、かなりの長年月使用されたことを窺わせる。住居跡外からの流れ込みと思われる。

鉄 器 (第19図2・3、図版16-2)

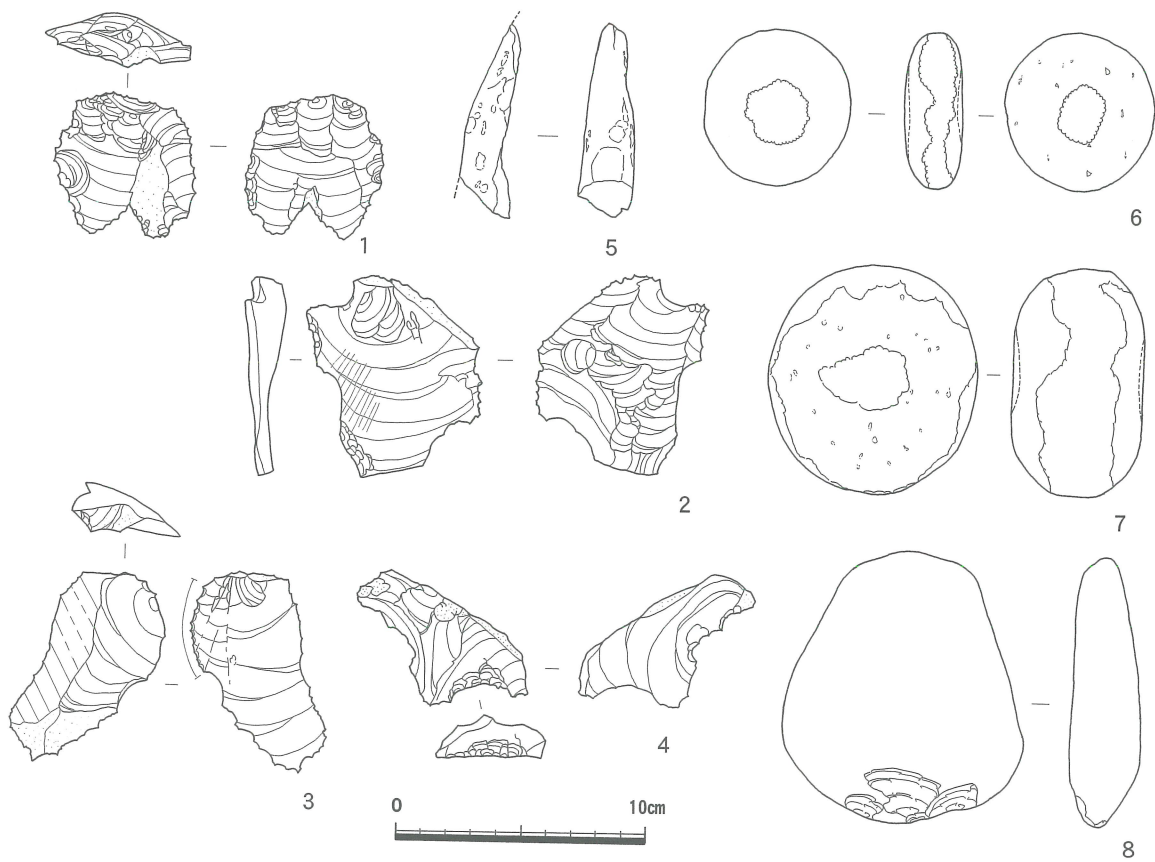
2は刀子茎と思われる資料で、全体に錆化が激しい。全長48mmを測り、茎部で長さ28mm、幅10mm、厚さ6mmを測る。3は長さ26mm、幅4mm、厚さ2mmの資料で、上位は中空部があり、下位は厚さ1mmの薄板状となる。全体に錆化が激しく、器種は不明である。ほかに2号竪穴住居跡からは鉄滓がわずかながら出土している。

石 器 (第20図、図版11-3)

2号竪穴住居跡から出土した石器は、ドット・マップで取上げたもので62点ある。器種は黒曜石の剥片石器1点、剥片5点、碎片19点、安山岩の凹石6点、水磨を受けた安山岩の円礫を含め計62点である。そのうちの8点を図示した。1(取上番号52、以下同じ。)は漆黒色黒曜石を素材にした剥片で、縁辺に微細な使用痕を留める資料である。剥片剥取後主要剥離面に3回の剥離を行うが、この打面は背面にフィンジーしており、折り取った剥片を素材としたものである。2(2J)は自然打面から剥取された漆黒色黒曜石の不定形剥片である。主剥離面に大きなヴァルヴァ・スカーを残し、背面に4面の剥離面を残す。3(63)はやや透明感のある薄茶色黒曜石を素材としており、縁辺部に微細な使用痕を留める剥片である。背面には自然面が多く残り、1面の剥離面を残す。打面は調整打面で、打面調整は何回も行うが上手に再生できていない。4(2J)は不純物を多く含むやや質の悪い黒曜石の不定形剥片を素材にした抉入石器である。5(2J)は蛇紋岩を素材にした磨製石斧の破片である。風化を受け表面の研磨痕は認められない。芯は緑がかった白色、表面は薄茶がかった白色を呈する。資料は体部側面の資料で、頭部と刃部は大きく欠損している。6(6)は6cmの扁平な水磨を受けた円礫を素材としている。表裏両面の中央部には径2.5cm、深さ2mm程の敲打による凹部が見られ、使用の痕跡と認められる。また周縁部には幅1cm程の敲打面が巡っており、使用による平坦面と想定される。重量は125gを測る。7(5)は6より大きさや重量の点において一回り大きい資料で、9×8cm、厚さ5.5cm、重量680gである。使用の痕跡も6と同様で、表裏中央部の凹部、周縁部の帯状敲打痕も7と同様である。8(1)は略三角形の安山岩扁平自然礫を素材としており、全面水磨を受けている。この素材の長端部の片面のみに敲打痕を留め、調整途時の



第19図 2号竖穴住居跡ほか出土遺物実測図(1~6)(S-1/2)



第20図 2号竖穴住居跡出土石器実測図(1~8)(1~4は2/3、5~8は1/3)

資料であることを窺わせている。重量は405gを測る。これら6～8の資料は素材及び加工のあり方が最も単純であり、かつ合理的なものであるため、古墳時代においても主体的な道具として利・活用されたものである。

以上が2号竪穴住居跡からの出土遺物であり、布留式期の所産である。

6. 土 壙

－ 1. 1号土壙（第21図、図版7－1）

B－2トレンチで検出。長軸1m、短軸75cm、深さ10cmを測る楕円形状の土壙である。床面は南側が低くなっている。土壙中央に10～20cm大の安山岩自然石を3個埋置している。覆土は褐色粘質土で、炭化物を含んでいる。

－ 2. 2号土壙（第21図、図版7－2・8）

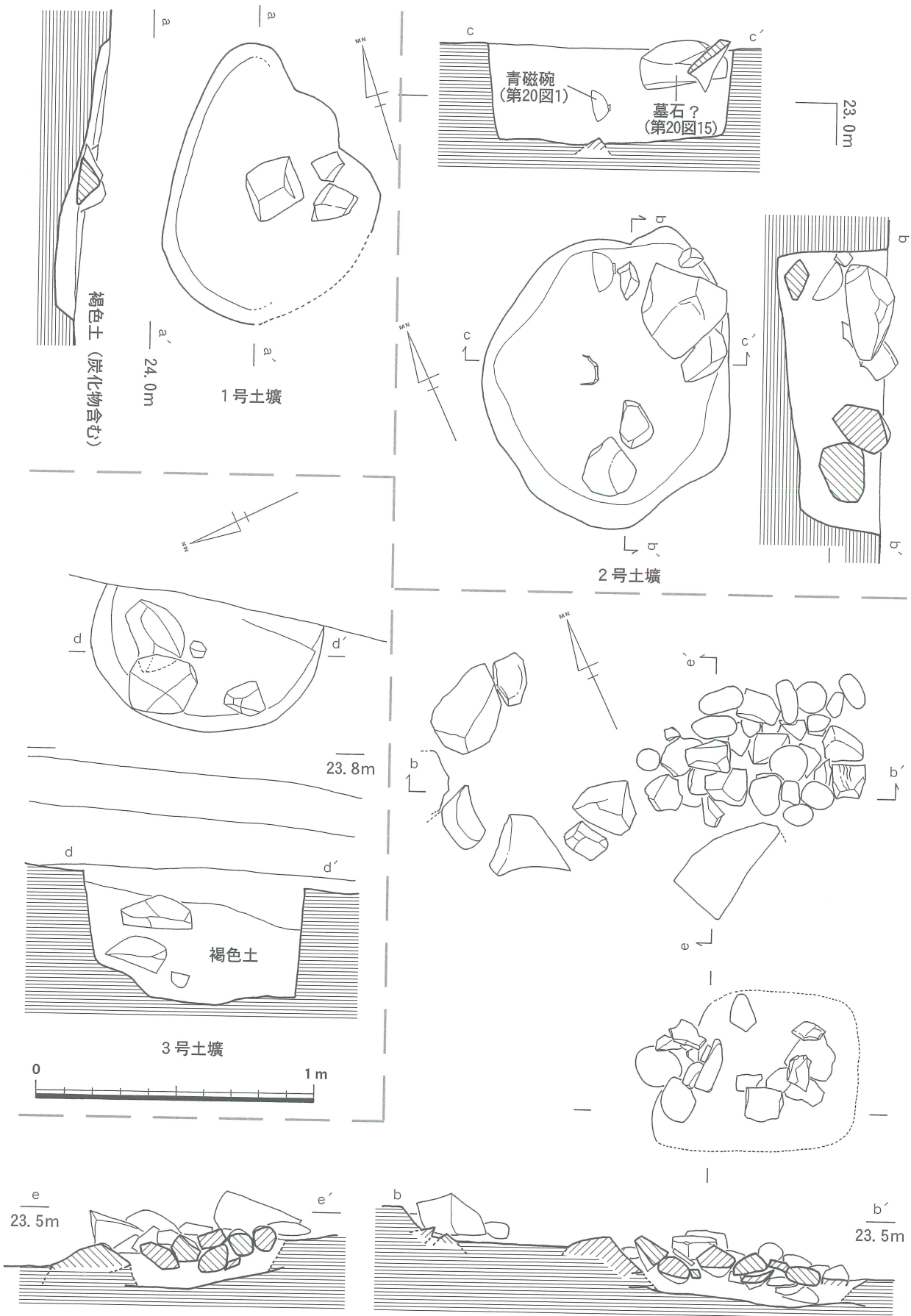
C－2トレンチで検出。長軸1m、短軸0.9m、深さ30～40cmの略楕円形状の土壙である。床面は平坦であるが、やや北側に傾斜している。床面からの壁の立ち上がりはほぼ直角である。覆土は茶褐色粘質土で土器片をわずかに含んでいる。土壙中には7個の塊石が認められ、ほとんどが土壙中ほどより上位で出土している。北東隅の塊石は安山岩自然石を長さ30cm程に打割して利用したもので、略三角形形状を呈している。平坦面を下に向けて埋まっており、打割面を底面として正位に戻すと表面に線刻が認められた。墓石あるいは供養塔的なものとして利用された可能性が指摘できる。また北壁近く、中ほどの深度で半割された鎬蓮弁文碗が伏せた状態で確認された。また、床面北側には土壙に切られた柱穴163が検出されている。

出土遺物（第22図、図版17）

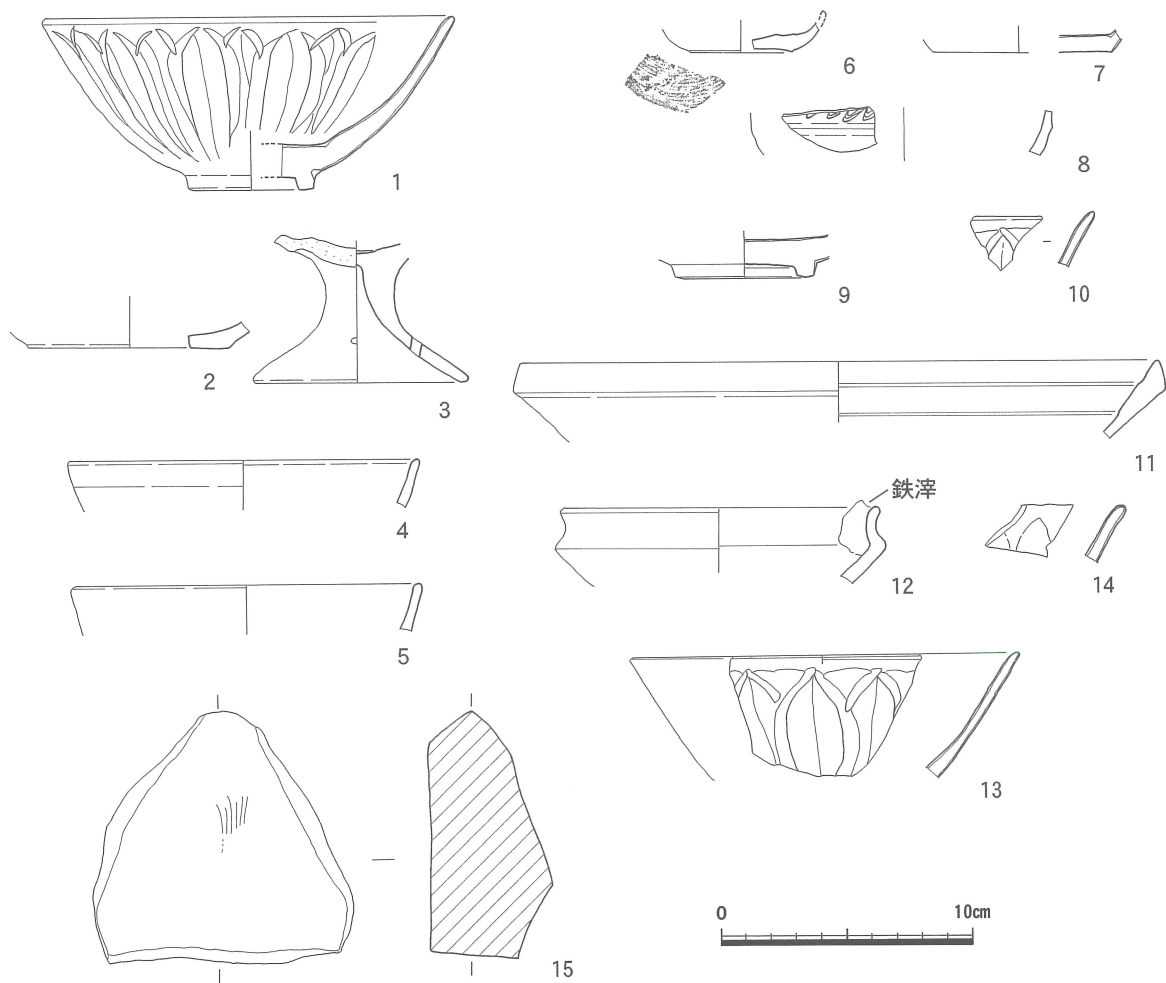
1は鎬蓮弁文碗青磁で半割されて1／2弱が残っていた。厚い底部から緩やかに伸び上がり、口縁部はわずかに端反り気味である。高台は強く削りこみ、高台外の体部との際は「コ」の字状に、また内面の見込み部も鋭く削っている。蓮弁は片ヘラ切りで緩やかな弧状の型に2回で1弁飛ばしに削り出し、次に間弁を剣先部が合わさるようにハの字状に削っている。その後蓮弁の鎬を付けたものと思われる。口唇部外面直下に部分的に沈線が入る。釉薬は微細な気泡を多く観察でき、透明感のあるオリーブ黄に発色している。施釉は高台内に流れ込みはあるものの豊付けまでは露胎で、全体に厚く掛けている。貫入は認められない。

2は土師器の皿底部資料で復元底径8cmを測る。調整手法は器表が荒れていて不明である。胎土は水簸した粘土を使用しており精良である。焼成も良好である。

15は安山岩の自然塊石を割りにとって略三角形形状に仕立てたもので、打割面は鮮明であるものの、以外の面には自然の風化面が残っている。高さ29～31cm、幅31cm、厚さ14.5cmを測り、表面は平坦である。この表面の中央から少し上位に浅い7本の線刻がされている。線刻の断面はV字状で浅い薬研彫である。7本の線刻の始点と終点は一定していないが、始・終点ともに引上げ気味に線刻するのではなく、打ち込み・止めはしっかりとしている。重量は18.8kgを測る。



第21図 1~3号土坑、円礫集石遺構実測図 (S-1/20)



第22図 土壙、柱穴出土遺物実測図（1～15）（15は1/6で、その他は1/3）

一 3. 3号土壙（第21図、図版9-1）

C-5トレンチで検出し、一部調査区外に延びている。径85cm程の円形状を示すものと見られ、深さは40cmを測る。床面は平坦で、北側床面から10cmまでに段を有している。小児人頭大と拳大の安山岩自然礫を3個包含している。覆土は粘性の強い褐色土を基調に、上位は黒褐色土である。弥生時代の土器や土師器を含んでいる。

出土遺物（第22図、図版17）

3は高坏または鉢の脚台と思われる資料で、脚柱部は中空である。鉢部との接合部は充填しているようで、見込み部分が凹んでいる。調整は不詳であるが、内外面ナデと思われる。径4mm程の小孔を3箇所ほど穿つ。

7. 円礫集石遺構 (第21図、図版9-2)

C-2 トレンチにおいて検出した。拳大の安山岩円礫と自然礫を長軸80cm、短軸60cmの範囲に楕円形状に埋置した遺構である。周縁部より中央部がやや凹んでいる。礫は概ね一重に置かれたものであるが、部分的に二重になったところもある。この集石は一回り大きい土壌の上に据え置かれたものであるが、西側の肩部は確認されるものの東側は消滅している。土壌は緩い舟底状の床面を有し、集石との間には10cm程の黒褐色粘質土が確認される。この土壌は柱穴44を切って営まれている。

8. 建物

調査区内において153本の柱穴を確認した。B列以北においては、柱穴は散在する状況を見せており、C列以南に建物は立地するものと考えられる。しかし市内上・下大渡野町に所在する尾和谷城の建物立地を参考にすると、一定の空地を設けて建物が立地しており、このことからB列以北に一定の間隔を置いて存在する可能性も指摘される。

さて、調査区内において柱穴の関連性はなかなか指摘できず、わずかに以下の建物を想定するにとどまった。建物はすべて掘立柱建物である。

一 1. 建物1 (第23図)

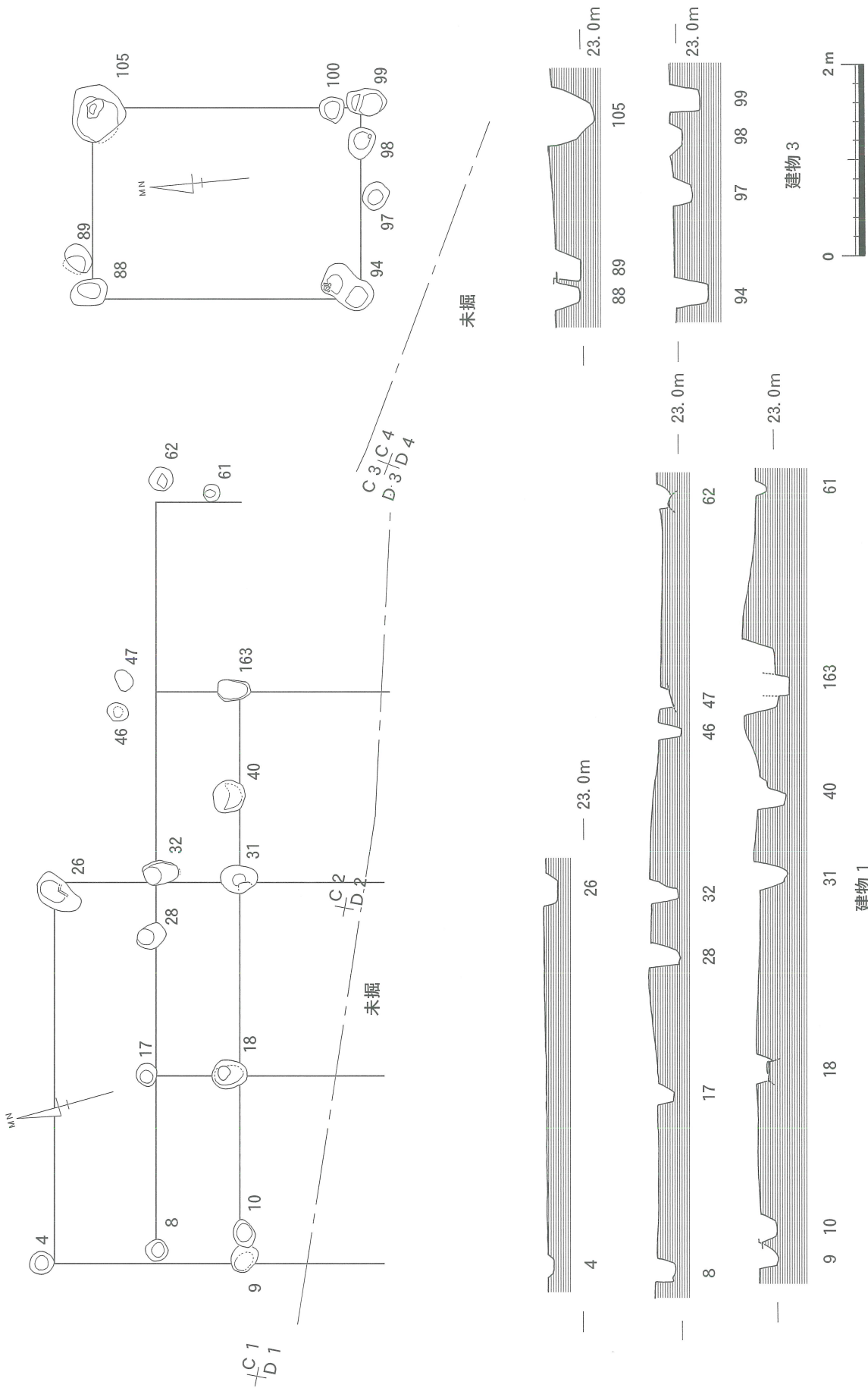
柱穴列①4-○-26、列②8-17-32-46、列③9-18-31-163は東西方(N-75°-W)に棟を取ることが確認できる。芯々距離は列①が2m-2m、列②が1.8m-2.1m-2m、列③が2m-2m-2mである。北側列②は底部分と想定され、列③との列間は90cm程を測る。列③と列①の列間は2mを測り、北側に半間分建て増ししたものであろう。主屋となるのは柱穴列③の南側に展開するものと想定される。

一 2. 建物2 (第24図)

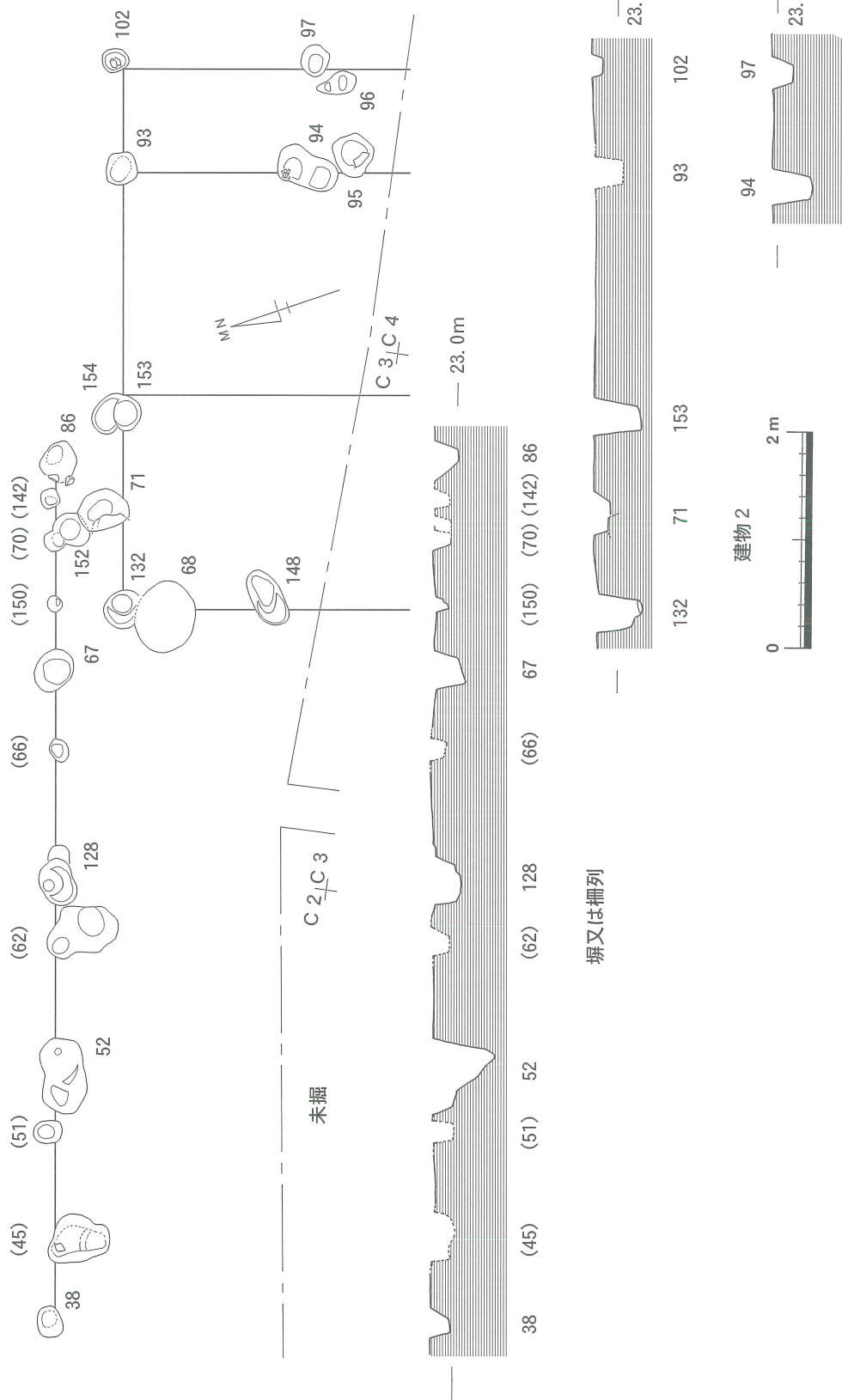
建物1の東5.5mの位置で、棟方向はほぼ同一(N-72°-W)である。柱穴列①132-153-93-102に柱穴列②94-97が並行している。芯々距離は列①が1.8m-2.2m-1m、列②が1mで93-94は1.9m、102-97は1.9mを測ることから東側に庇を有する建物と想定される。この建物も主屋は列②の南側に想定される。柱穴132、153からは青磁・白磁等の多くの遺物を検出した。

柱穴132 (第25図)

2号竪穴住居跡南端にあり径35×32cmの円形状を呈す。底面20×18cmほどで、深さは約40cmを測る。底面から5~10cmの高さで西側に段を有している。遺物は底面上に石を据え、その上位に15cm程遺物を埋め、さらに1石を据えて15cmの深さに遺物を埋めていた。遺物の集積は円筒形状であり周壁からは10cm前後の隙間があった。このことから柱材を抜いた後に一時に埋め込んだことが窺え、遺物も同時性を有するものである。これら遺物は複数器種、複数個体あるものの、完形に復する個体はなかった。



第23图 建物1、3実測図 (S-1/60)

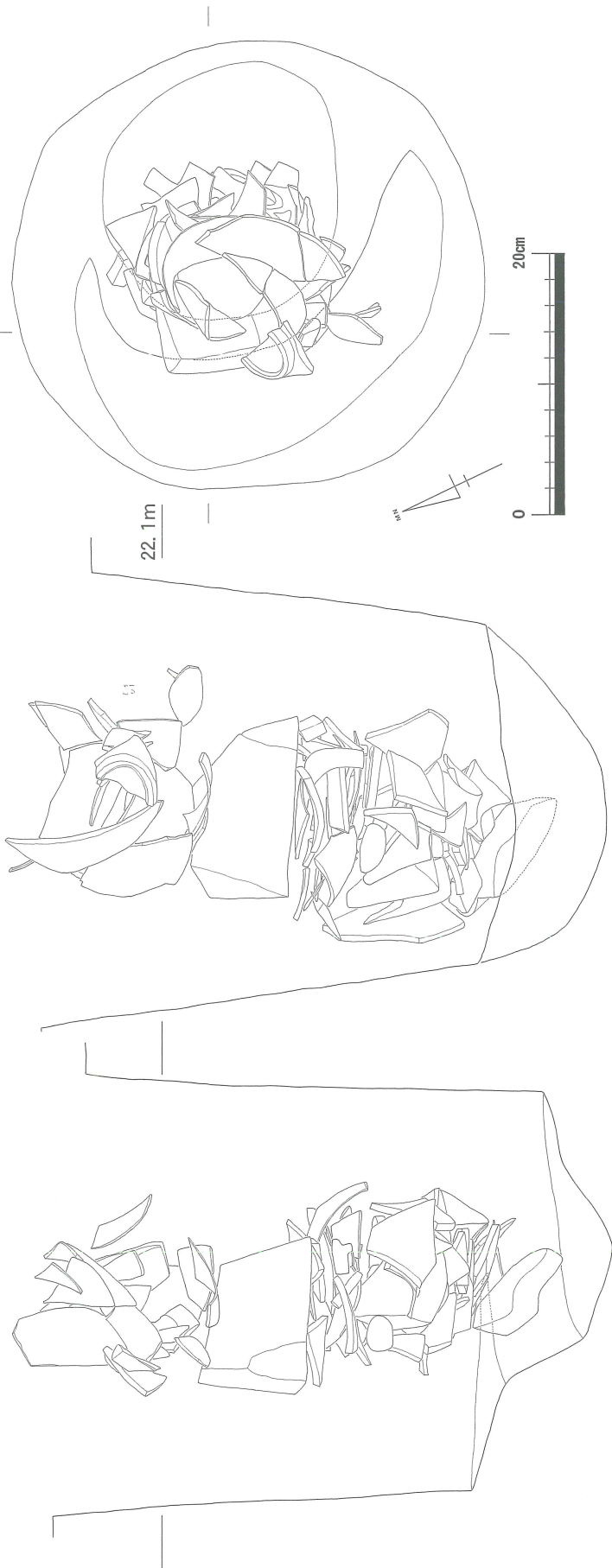


第24図 建物2、堀又は柵列実測図 (S-1/60)

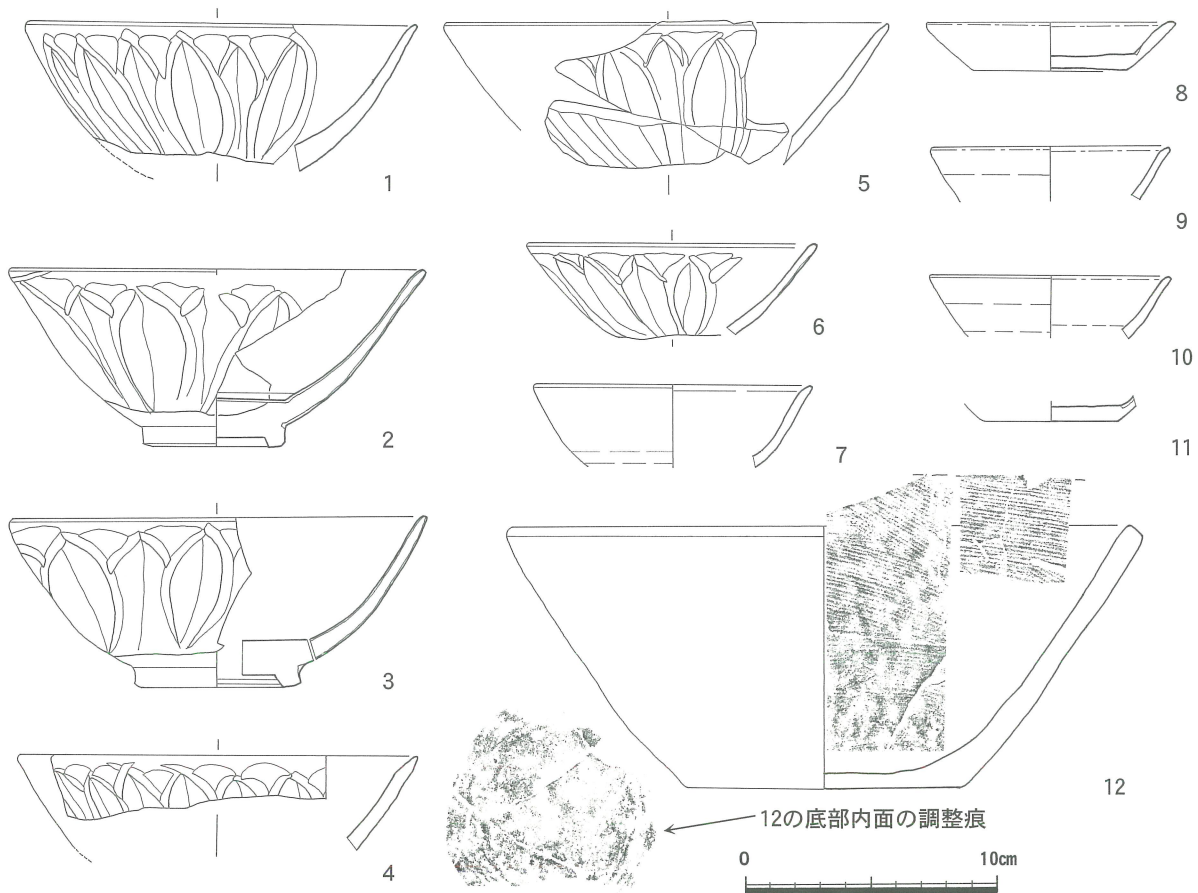
出土遺物

青 磁 (第26図1～6、図版18)

1～6は鏝蓮弁文の青磁碗である。1は蓮弁文を16弁陽刻する。蓮弁は片へら切りで緩やかな弧状の形に2回で1弁飛ばしに削り出し、次に間弁を剣先部が合わさるようにハの字状に弧状に丁寧に削っている。その後蓮弁と間弁と口縁部の三角形の高まり部分を扇形に削って終了している。蓮弁・間弁の鏝部分の作り出しはどの時点で行うのか不明であるが、最終段階であろう。この陽刻を行った後釉薬を掛けて焼成している。釉薬は厚いところで0.8mm程である。大まかな貫入が入る。2も陽刻方法は同一である。見込み部分は片へら切りで一段深くして際立たせ、伸び上がる体部に少し端反りする口縁部を付している。底部は厚く高台は強く削り込み、また外面体部との際は「コ」字形に深く削り込んで際立たせている。釉薬の発色はやや悪く、不透明感がある。この厚い釉薬により陽刻の蓮弁は不鮮明に焼きあがっている。施釉は、高台内は行わず、畳付けはぬぐっている。内外面は0.5～0.8mmほどの厚さで掛り、見込み・高台際には厚く溜まっている。全体に貫入が入る。3は1と同様の手法で陽刻を施している。底部は厚く高台部は強く挟り込む。高台外と体部の際は直角に削っている。施



第25図 柱穴132遺物出土状況図 (S-1/5)



第26図 柱穴132出土遺物実測図 (1~12) (S-1/3)

釉は、見込みは露胎で外面は高台まで施釉するが、一部流れて畳付けから高台内まで及んでいる。畳付け部には砂が付着している。内外面に大きな貫入が認められる。4も陽刻方法は同様である。全体の片へら切りが曲線的に行われており、デフォルメ化は少ない。釉薬は微細な気泡が観察でき、透明度は高い。5も陽刻方法は同一である。釉薬は透明感のあるオリーブ色で、部分的に火表に当たった箇所はより茶色に窯変している。内外面に細かな貫入が入る。6は口径11.6cmを測る。蓮弁文の陽刻手法は他例と同じである。底部は欠損しているが、体部は口縁部にかけて緩やかに外反する。釉薬は厚い部分で0.5mmほど掛っており、不透明の明緑灰色に発色している。釉薬には気泡が多く見受けられ、焼成することでこの気泡が発泡し器表にわずかの細孔を生じている。また火表の部分は薄茶色に焼け、部分的に大きな丸いクレーター状の凹部を見せる。この部分には無数の細孔が集合して認められる。内面には大きな貫入が入る。

白磁 (第26図7~11、図版18)

7~11は口禿げの皿で、8・11は同型・同巧である。7は底部を欠損する。体部から口縁部にかけて緩やかに外反し、端部は端反りさせる。釉薬は気泡を含み、灰色がかった白色に発色している。施釉は体部下半から底部は露胎と見られる。8は全形を知りうる資料で内面見込み

と体部の際はカンナで界線を削り、体部は外反させる。釉薬は全面に掛け、口縁部は伏焼きのため釉薬をぬぐっている。8の底面は釉薬を刷毛で塗ったような痕跡を残し、また11は釉薬が掛らない部分が見受けられる。8は内外面に貫入が入る。9・10は同一個体と思われる資料で7より一回り小さいが、同型・同巧である。

瓦質土器（第26図12、図版18）

個体42～63が同一個体である。完形に復元できず、図上で復元図化した。瓦質の鉢で片口部を欠損する。薄い底部から外上方へ立ち上がる口縁部が付く。調整は内面ササラ状の工具で横方向に調整し、外面はナデ仕上げ、体部下半から底部にかけてはヘラケズリを施す。内面下半から見込み部にかけて調整痕が擦り減っている。東播系の資料である。

滑石製品（第19図4、図版16-2）

滑石製の容器と想定されるもので、外面から底部にいたる資料であるが、全形を知りえない。底部から直線的に開く器形を示している。調整は外面から底部にかけて丁寧加工され、加工痕を留めない。内面は複数の線状痕を留めており容器状になることを窺わせる。器壁は薄く調整されている。

柱穴153

2号竪穴住居跡東南隅で壁を切る形で検出した。平面系は略円形状で32×27cm、深さ43cmを測る。覆土は炭化物を含む茶黒色粘質土である。遺物は上面近くで滑石製品が底部を上にして検出され、さらに20cm程下位、底面から15cm程の深さで鎬蓮弁文碗が検出された。

出土遺物

滑石製品（第19図5、図版16-2）

滑石製品で浅い皿状の容器に短い把手を付けている。容器部分は径5.7cm程で、高さは17mmを測る。内刳部分の深さは9mm程である。外面調整はノミ状の刃幅の短い工具で丁寧に仕上げられており加工痕はあまり認められない。内面も同様の工具で調整するが、底面には線状痕を多く残している。底部外面には丸ノミ状の工具で直線的に施文している。

青磁（第22図14、図版17）

鎬蓮弁文青磁碗の口縁部小片であるが、成形・調整手法は他の青磁資料と同巧である。生地はやや厚く成形され口縁部はわずかに端反り気味である。釉薬は不透明で輝度が低く、灰オリーブ色に発色している。内外面に細かな貫入が入る。

一 3. 建物3（第23図）

88-105-99-94の1間×1間の建物である。芯々距離は2m-2.8m-2m-2.8mを測り、南北方が棟方向（N-7°-E）と想定される。柱穴88からは二重口縁壺の口縁部に鉄滓が付着した資料が出土しており、建物3はこの時期以降の所産である。

柱穴88

C-4 トレンチに位置し、建物3を構成する1本である。径状は楕円形状で40×28cm、深さ25cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

出土遺物（第22図12、図版17）

二重口縁壺の口縁部資料である。緩やかに内湾・外傾する口縁部に、反転する立ち上がり部が付いている。内面には鉄滓が付着している。色調は内外面ともに浅黄～灰黄色で2次的被熱により変色し、器表も荒れている。製鉄作業はこの土器の時期以降であることを示している。

一 4 . 塀又は柵列（第24図）

38-52-128-67-86が連結している。芯々距離は2m-2m-2m-2mで建物2からは60cm・2尺の距離があり、軒先下に位置する。板塀若しくは柵列の基礎部分であり、主軸はN-72°-Wで建物2と並列・並存するものである。柱穴67からは青磁鎬蓮弁文碗、86からは青磁鎬蓮弁文碗の口縁部と高台部、瓦質鉢片が出土しており、柱穴132出土品と同時期である。

柱穴86

建物2に付属すると想定される塀又は柵列を構成する柱穴で、C-3 トレンチ、2号竪穴住居跡内にある。径状は略円形状で40×35cm、深さは30cmを測る。

出土遺物（第22図9～11、図版17）

9は青磁碗の高台部で高台内は鋭角に削り込み、外面体部との際も直角に近く削り込んでいる。施釉は高台内は露胎、畳付けまで釉薬が流れており、ぬぐいを行っていない。10は鎬蓮弁文青磁碗の口縁部資料で釉薬が厚く陽刻が不鮮明となっているが、片へら切りで文様を施文している。釉薬は不透明に発色し厚く掛っている。11は瓦質の鉢で小片のため口径は不明である。体部は非常に薄く水挽きを行い、三角形の口縁部を付けている。内面口縁下1～2cm部分は内面に厚く挽き上下に線状痕を残している。

一 5 . その他の柱穴

以下は現時点で建物との関連性を想定し得ない柱穴で、遺物を出土したものを記しておく。なお、前記柱穴を含めその属性を第5・6表に掲載している。

柱穴20

C-1 トレンチで検出している。平面形状は略円形状で23×20cm、深さ13cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。

出土遺物（第22図4、図版17）

土師質の内黒碗の口縁部資料である。小片のため口径は不明である。内湾気味に立ち上がり、口唇はやや尖り気味に丸く納めている。外面灰白色、内面薄墨色である。外面口縁下1cmに水挽き痕と思われる高まりが看取される。

柱穴30

C-1 トレンチ調査区南端で検出した。2段掘りの柱穴で径52×35cm、深さ37cmの楕円形状を呈する。底面から10cmの高さで北側に狭い平坦面を有する。覆土は黒褐色粘質土で石鍋は上位で検出した。

出土遺物（第19図6、図版16-2）

石鍋底部片で厚さは概ね15mm程である。底面の加工痕は明瞭であるが、体部外面は若干磨耗している。内面は丁寧に仕上げられており滑らかである。底部の一部に炭化物の付着が見られる。

柱穴45

C-2 トレンチにある不定形状のもので、長軸60cm、短軸45cm、深さは22cm～26cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。検出時は不分明であったが、柱穴2本の複合の可能性が高い。

出土遺物（第22図5～7、図版17）

5は土師質の内黒碗片で小片のため口径は不明である。内湾気味に立ち上がる口縁部の端部は丸く納めている。外面はにぶい橙色、内面は黒色である。6は土師器皿で底径4cmを測る。底部は糸切り離しである。見込みには水挽きによる凹凸が看取される。7は白磁の皿で口縁部は口禿げであろうが欠損する。底径73mmを測る。見込みには圏線を鋭角にカンナで削り込む。内外面に貫入を認める。

柱穴65

C-3 トレンチ、2号竪穴住居跡内にある。平面形状は楕円形状で35×28cm、深さ30cmを測る。覆土は炭化物や焼土を含む黒褐色の強粘性土である。

出土遺物（第22図8、図版17）

陶質系と思われる資料で、径状は坏状になると想定される。低い突帯が一巡し、その上位に3本単位の櫛で波状文を施文している。焼成の悪い須恵器に似通うが、手持ちが軽いことや、須恵器質でないことから別類とした。

柱穴151

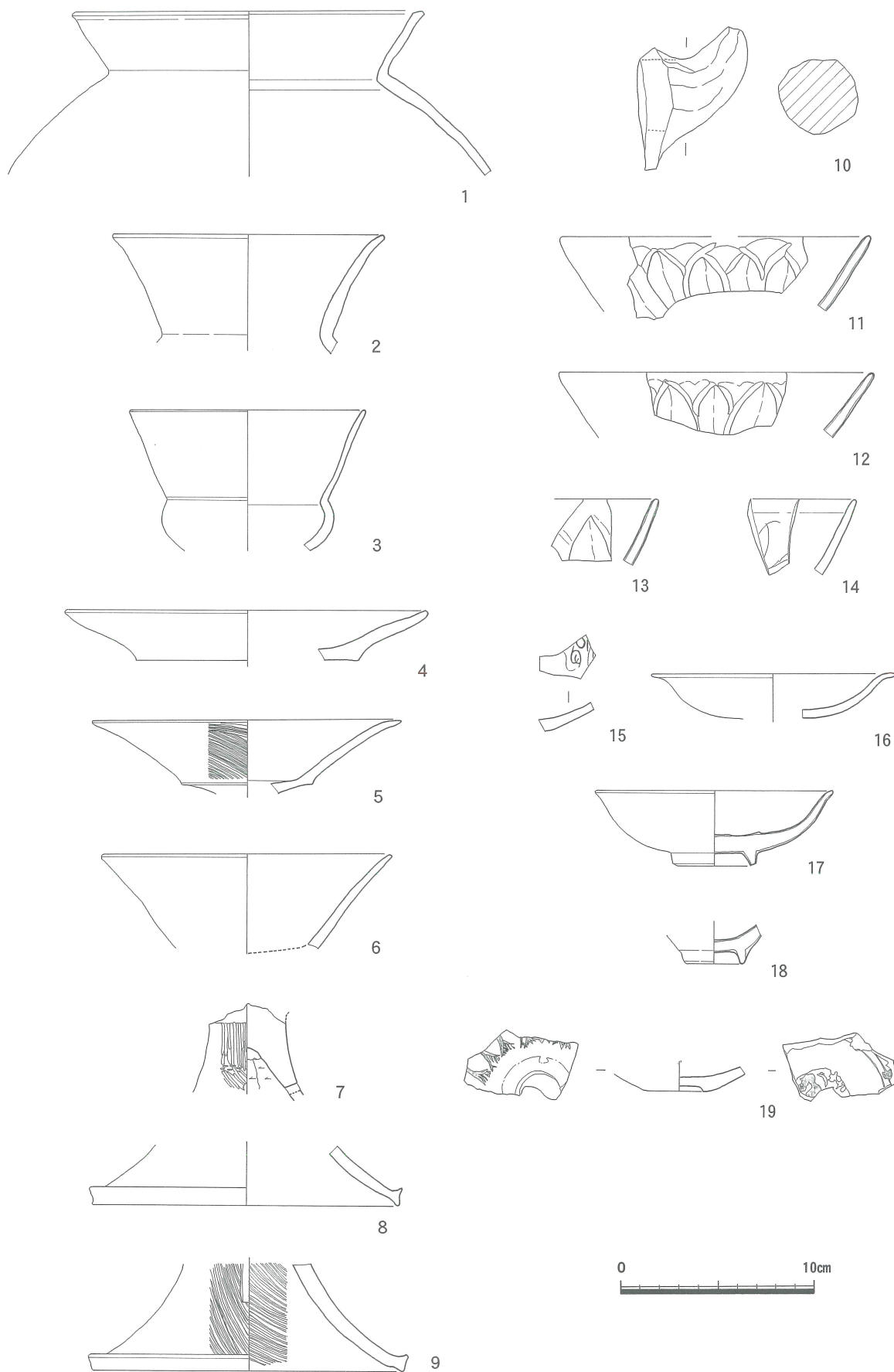
2号竪穴住居跡内にあり、住居跡の柱穴と重複していた。平面形状は楕円形状で27×22cm、深さ25cmを測る。内壁の東から北側面は被熱により赤変固化しており、本来はカマド的機能を果たした柱穴に、後世の柱穴が重複したものと理解された。覆土は茶褐色粘質土で60点程の遺物が出土した。弥生土器、土師器が多い中、鉄滓、結晶片岩等とともに底面から鎬蓮弁文碗が出土した。

出土遺物（第22図13、図版17）

鎬蓮弁文青磁碗で、蓮弁は2回の片ヘラ切りで弧状の形に1弁飛ばしに削り出し、次に間弁を剣先部が合わさるようにハの字状に削っている。その後蓮弁と間弁と口縁部の三角形の高まり部分を扇形に削って終了している。蓮弁・間弁の鎬部分の作り出しは最終段階であろう。釉薬は透明度の高い灰白色～オリーブ黄色を呈している。器表に小孔が認められ、貫入が入る。

9. その他の出土遺物 (第27図、図版19)

1は布留式系甕で、球形の体部から大きく外反する口縁部を有し、口縁部は内湾気味に外傾させている。口唇部は内傾させ端部は外上方へ尖り気味に納める。調整手法は器表が荒れているため不明である。2・3は小型の壺で、2は口縁部資料である。頸部で大きく外上方へ伸び上がるもので端部は平坦に仕上げる。調整は器表が荒れていて不明。3は小型丸底埴で扁球形の体部に締まった頸部が付き、反転して高く伸び上がる口縁部を有する。口縁部の器壁は薄く、端部は尖り気味に納める。ヘラミガキと思われるが器表が荒れており不明である。精製土器である。4は複合口縁壺で大きく外反するが、端部は内湾させている。口唇部は丸く納める。調整手法は不明である。5・6は高坏坏部で、5は底部から大きく外反する口縁部を有している。口唇部は尖り気味に納める。底部との接合部はシャープである。調整は外面底部から接合部上までナデ、上位はハケ、内面から口唇部はナデ仕上げである。6は身が深くなるようで大きく伸び上がる口縁を有している。口唇部は平坦に納める。内外面共にナデ仕上げである。7は脚台部資料で高坏である。外面上位は縦方向のヘラミガキ、以下は斜め方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリでヘラの止まりが線状に残っている。頂部はケズリ残している。その後円孔を3箇所ほど穿つ。8・9は器台の脚部資料で、ともに脚端部を中凹みし調整し、上下に尖らせている。9は長方形の透かしを4～5箇所入れる。調整は内外面ともにハケ調整である。10は牛角形把手資料で、甑の一部であろう。断面略円形で成形の鈍い稜線を残す。甑内面は縦方向のヘラケズリである。器壁は1cmと厚い。焼成は良好で、堅緻である。11は青磁碗で調整手法は他と同じである。釉薬が厚く掛り鎔をはじめ蓮弁が不鮮明である。釉薬は全体に0.5～1mm程掛り透明感のあるオリブ黄色に発色している。釉薬の中に微細な多数の気泡を認める。12は青磁碗で調整手法は他と同じである。釉薬が厚く掛り鎔をはじめ蓮弁が不鮮明である。釉薬は全体に0.5mm程掛り不透明なオリブ黄色に発色している。13は青磁碗で調整手法は他と同じである。釉薬が口唇部は薄く、体部は厚く掛り鎔をはじめ蓮弁が不鮮明である。釉薬は全体に0.5～1mm程掛り透明感のあるオリブ黄色に発色している。細かな貫入が認められる。14は青磁碗で緩やかに外反する。外面無文、内面体部に片ヘラ切りの文様を施文する。釉薬は透明感がありオリブ黄色に発色している。内外面に貫入が入る。15も外面無文で内面に施文する青磁碗である。体部下半と思われる資料で、片ヘラ切りの文様を施文する。透明感のある釉薬で灰オリブ色に発色している。16は白磁皿で口縁部が端反りする資料で、高台部を欠損している。釉薬は全体に掛けるが、体部下半、見込みとの際辺りはぬぐっている。蛇の目に剥いで重ね焼きをするためであろう。17は白磁皿で16より身が深く端反りは小さい。内面見込み蛇の目と高台畳付け以外は白濁した明緑灰色の釉薬を掛けている。器表に小さな発泡痕をわずかに残す。蛇の目部分には重ね焼きの痕跡を残す。18は青白磁の小坏で底部資料である。生地は白い良質の胎土で、鋭角に水挽きしている。施釉は畳付けを除いて厚く掛けている。釉薬と生地の際は黄橙色に発色している。19は青花の碁笥底皿で内面に二重圏線と、見込みに花卉文、外面に波濤文を染付けしている。



第27図 その他の出土遺物実測図 (S-1/3)

IV. 総括

以上、本遺跡出土の遺構や遺物について記述した。ここでは、本遺跡の所属時期や土地を含めた空間利用のあり方を考察して総括としたい。

本遺跡の利・活用では大まかに以下の時期に区分することができる。

- I 期. 弥生時代後期に墓域として利用
- II 期. 古墳時代前期に生活域として利用
- III 期. 古墳時代後期に墓域(?)として利用
- IV 期. 11~12世紀に出城的(?)用途で使用
- V 期. 13~14世紀に出城的(?)用途で使用
- VI 期. 15世紀代以降に出城的(?)用途で使用

I 期では1~3号甕棺が造墓されている。弥生時代後期初頭から前半にかけてのもので、ほぼ連続して造墓されたものと想定され3号→1・2号の順である。周辺には鏡を副葬する例もあったらしく、2号竪穴住居跡から出土した鏡はその用に供されたものと思われる。

II 期は古墳時代前期の布留式期のもので2棟の竪穴住居が営まれている。形状は隅丸の方形あるいは長方形で、住居跡中央部に炉を設けている。2号住居跡の炉が不分明で、柱穴上の内壁がかなり焼けており、地床炉的・カマド的なものを想定させるが闡明できなかった。類例として冷泉遺跡2号住居跡の炉跡とされたものと類似しようか(注1)。

2棟の建物の前後関係は明確でないが、1号出土土器のほうが若干ながら古相を呈している。2号竪穴住居あるいは包含層から出土した土器は、布留式期の典型と思われる甕を出土しているものの、体部内面の調整手法が大きく異なっている点を指摘できる。すなわち本来ヘラケズリで調整されるべき内面調整が、ほとんどハケ調整に終始していることである。技術的には在来の技術であるハケ調整上に、外来の甕の形のモチーフが重なった結果である。このような在来の技術と外来のモチーフの混淆は、平山遺跡B地点(注2)、小野曾屋遺跡(注3)、稗田遺跡(注4)、冷泉遺跡(注1)など多くの遺跡で見られるようになった。

これら古式土師器を出土する遺跡については古門雅高氏(注5)や、大野安生氏(注1)が論考しており、その変遷について首肯できるところである。

これらの資料によれば在来の技術と外来のモチーフの混淆は弥生時代終末から古墳時代初頭の冷泉遺跡にはすでに見られ、終期は古門氏の第4期まで甕形土器の一部に残存するようである。この推移に照らすと本遺跡出土一括土器群は古門氏の第2期に属し、4世紀後半頃の時期に比定される。また既報(注6)の土器群に後続して営まれたことが判明する。

さて、この一括資料の組成について若干言及すると、甕4類、壺5類、高坏2類、鉢3類、器台3類に分類でき、第2表のように整理が可能である。甕I類は弥生後期の所産、II類は在地系のもの、III類の第11図3は壺II aとの関連が口唇下の調整に認められる。壺II類は外来的

要素が強く認められ、山陰・山陽地方との関係を示している。高坏は2類3小分類したが脚台部のみの分類であり、I類には大きく外反する坏部が、II a類には第12図30～33などの坏部が付くものである。II b類としたものは坏又は鉢が付くものであろう。よってこの場合は鉢IV類として分類すべきであろう。鉢III類は壺V類に近似するものの製作手法が異なっており、別類としたものである。甕分類の中で台付きの甕を分類し得なかったが、甕II類には台が付く可能性が高い。個体として確認した甕の脚台は70片ほどあり、極めて激しく割れている。個別別によると少なくとも20個体以上は存在しており、台付きの甕が煮沸具として機能していたことが分かる。また個体数からして破損する確率もかなり高かったことが窺える。

このII期に設定した古墳時代布留式期の土器資料は一括性が高く、古式土師器の編年資料として活用できるものである。ただこの期の前期の資料である上原貝塚資料(注6)が表採資料に基づくものであり、正確な発掘資料の提示が求められる。貝塚資料は一部布留式期の資料を含むものの、在地系資料で本遺跡から出土しないものを含んでおり、本遺跡に先行するものとして先II期に位置づけられる。

III期は2号竪穴住居跡から検出された須恵器が存在する。坏蓋と身で複数個体存在するが、接合が困難である。外に器種として高坏と思われる資料があるが、該期の遺構の存在は認めず、またII期以降の土師器の検出もなされなかった。このことからこの須恵器群は周辺遺構からの流れ込みと思われ、周辺に古墳などの埋葬遺構が存在していたことを髣髴させる。検出した須恵器はIII b期頃に比定可能で6世紀後半頃の所産である。

IV期の資料として内外面を燻した黒色土器・内黒碗を取上げることができる。遺物の出土量は極めて少なく一時期を構成するものか疑問は残るが、画期として設定しておく。この期の遺構は明確にできないが、『佐々木家文書』(注7)に宇木氏が登場する時期に該当するものであり、宇木城の萌芽的時期に相当するものとして設定した。

上 原 遺 跡				挿 図 番 号	平山遺跡B地点(注2)	
甕	I	逆L字状口縁		16-9		
	II	a	「く」字状口縁	口唇平坦	12-3	II a
		b		口唇尖る	16-8	III b
	III	a	内湾口縁	口唇斜位、上下伸張	16-3、6	
		b		口唇平坦、内折れ	12-1、2、16-2~5	I
IV		口縁外面肥厚		16-7	III a	
壺	I		複合口縁	12-4、16-15		
	II	a	二重口縁	口唇内外伸張	12-5、16-13、14	
		b		口唇丸く納める	12-6、16-10~12	
	III	a	直口縁	口唇角張る	16-17	
		b		口唇丸く納める	16-16	
IV		小型壺		17-21~23、27-2	鉢III	
V		小型丸底埴		17-24~26、27-3		
高坏	I		円筒状脚		12-12	III
	II	a	裾開き脚	屈曲するもの	12-10、11、15、17-37、27-7	II a
b		屈曲せず低脚のもの		12-14、17-34~36		
鉢	I		外反口縁を付すもの	12-7		
	II		直口縁	17-29	盥	
	III		Iより大きく開くもの	17-27、28		
器台	I		在地系で透かしを有する	17-9、18-40、27-8、9		
	II		直線的に裾広がりなもの	17-38、39		
	III		鼓形のもの	17-19、20		

第2表 土器組成表

V期は龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗等を出土する時期である。森田氏分類（注8）の龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類（第24図-1など）、口禿の白磁皿Ⅸ-1類（第24図-5~11）、東播系鉢、滑石製品などを共伴する。遺構としては建物や土壌が確認されたが、2号土壌は墓的機能を示すものと理解される。『九州治乱記』（注9）など古記録に残された南北朝期の宇木城に先行・関連する遺構・遺物群と想定される。時期的には13世紀中頃~14世紀前半に比定される。以上のことから本遺跡は宇木城の出域的な機能を具備していたものと考えられ、建物が2棟ほど存在していたものと想定される。

VI期の遺構も明確でない。森田氏分類（注10）の白磁皿E-2類（第25図-16・17）や小野氏分類染付皿C群（第25図-19）などが代表するもので15世紀後半以降の時期が付与できる。

以上Ⅰ~Ⅵ期に分けて本遺跡の利・活用のあり方を追ってみたが、Ⅳ期以降は宇木城に伴うと見られる遺構・遺物が看取され、遺跡の立地から見るとき本地点が重要な位置を占めていたことが首肯される。宇木城は現在の有喜小学校の位置に比定されており、小字も「城山」と付されている。ただ城の立地が南方からの強風など自然環境を考慮して築城されたためであろう海域を眺望できる位置関係にない。宇木城が想定される丘陵の頂部が標高38m、南側の丘陵が現在の最高位で62mを測る。この位置関係からすると築城された往時においても現在の有喜港を望むくらいで、橘湾はそのほとんどが眺望できない立地であったのである。このため出城としての機能を持たせる意味において本遺跡が重要な位置と機能を占めたのであろう。宇木城は内陸に対する要害として、また本遺跡は海域に対する要害として利・活用されたことが十分に頷けるのである。以上により本遺跡はⅣ期には宇木城としてその萌芽を認めることが可能であり、宇木江五大夫（注7）などがその関係人として想定されるのである。

注1. 大村市教育委員会「冷泉遺跡」『黒丸遺跡ほか発掘調査概報Vol.3』2003

注2. 諫早市教育委員会『平山遺跡B地点』1981

注3. 諫早市教育委員会『小野曾屋遺跡』1995

注4. 大村市稗田遺跡調査会『稗田遺跡』1988

注5. 長崎県教育委員会「稗田原遺跡Ⅰ」『長崎県文化財調査報告書』第136号 1997

古門雅高「有明海西岸地域における弥生時代後期の土器」『西海考古』第6号 2005

注6. 秀島貞康「上原貝塚の採集遺物」『諫早史談』第13号 1981

注7. 山口隼正「佐々木家文書—中世肥前国関係史料拾遺—」『九州史学』第125号 2000

注8. 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
九州歴史資料館 1978

注9. 肥前史談会『肥前叢書・第二輯』1973

注10. 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982

(単位: mm)

棟号	番号	出土位置、取上番号(+) は接合関係	器種	口径	底径	器高	副径	色調		調整		文様		胎土	焼成	備考
								外面	内面	外面	内面	外面	内面			
12	1	1号整穴住居	甕	180		口縁高33		10YR6/2	10YR7/3		2	2		1・2・3	良好	
12	2	1号整穴住居	甕	140		口縁高20		5YR7/6	5YR7/6	不明	不明			1・2	良好	
12	3	1号整穴住居	甕	不明				7.5YR7/6	7.5YR7/6	1	2			1・2・3・4	良好	
12	4	1号整穴住居	複合口縁(?)蓋	不明				7.5YR6/4	7.5YR6/4	1→2	2			1・2・3	良好	内外面に炭化物
12	5	1号整穴住居	二重口縁蓋	160				7.5YR8/4	7.5YR8/4	不明	不明			1・3	やや甘い	
12	6	1号整穴住居	二重口縁蓋	152		口縁高30		7.5YR8/6	7.5YR8/6	2?	2			1・2・3・4	良好	
12	7	1号整穴住居	鉢	106				7.5YR5/1	7.5YR5/1	1	1+3			精良	良好	
12	8	1号整穴住居	手摺ね埴	60	49+			7.5YR7/6	7.5YR7/6	6	6			1・2 精良	良好	
12	9	1号整穴住居	器台		252			5YR6/6	5YR6/6	不明	不明			1・2・3・4	良好	
12	10	1号整穴住居	高坏					2.5YR6/8	2.5YR6/8	2?	5			1・2 精良	良好	
12	11	1号整穴住居	高坏					5YR6/2	5YR6/2	2	2			1・2 精良	良好	穿孔
12	12	1号整穴住居	高坏					7.5YR6/4	7.5YR6/4	不明	不明			1・2・3	良好	
12	13	1号整穴住居	高坏					7.5YR7/3	7.5YR7/3	不明	不明			1 精良	良好	
12	14	1号整穴住居	高坏		118			5YR7/6	5YR7/6	1→2	1			1・2・3	良好	穿孔
12	15	1号整穴住居	高坏					5YR7/8	5YR7/8	2?	2			1・2・3 精良	良好	
12	16	1号整穴住居	鉢又は甕脚台					5YR7/8	5YR7/8	2?	2?			1・2・3	良好	
12	17	1号整穴住居	鉢又は甕脚台	116		脚台高35		7.5YR7/4	7.5YR7/4	2?	2?			1・2	良好	
12	18	1号整穴住居	鉢又は甕脚台	114		脚台高35		7.5YR7/6	7.5YR7/6	2?	2?			1・2・3	良好	
12	19	1号整穴住居	鉢又は甕脚台	92		脚台高30		2.5YR7/6	2.5YR7/6	2	2			1・2	良好	
16	1	2号整穴住居・3+4	甕	244		口縁高32		10YR6/3	10YR6/3	1→2	1			1・2・4 精良	良好	
16	2	2号整穴住居・17+27	甕	214		口縁高29		10YR6/3	10YR6/3	1+2	1+2			1・2 精良	良好	
16	3	2号整穴住居・34	甕	196		口縁高38		2.5YR8/3	2.5YR8/3	不明	1			2 精良	良好	
16	4	2号整穴住居・29+71	甕	168		口縁高24	207	2.5YR6/8	2.5YR6/8	不明	不明			1・2 精良	良好	
16	5	2号整穴住居・668	甕	200		口縁高23		2.5YR6/3	2.5YR5/2	2	2			1・2・3	良好	
16	6	2号整穴住居・51	甕	162		口縁高28		2.5YR7/6	5YR7/4	2	2			1・2	良好	
16	7	2号整穴住居・33	甕	174		口縁高30		2.5YR6/4	2.5YR6/4	1+2	1+2			1・2・3	良好	
16	8	2号整穴住居・151	甕	217		口縁高21		5YR7/6-7/1	5YR7/6	不明	不明			1・2	良好	
16	9	2号整穴住居	甕	262				7.5YR5/2	7.5YR5/2	1+2	1+2			1・2・3	良好	
16	10	2号整穴住居・728	二重口縁蓋	142		口縁高48		2.5YR7/6	2.5YR7/6	不明	不明			1・2・4	良好	頸外径102
16	11	2号整穴住居・245	二重口縁蓋	133		口縁高35		2.5YR7/6	2.5YR7/6	不明	不明			2・3	良好	口縁外面沈泥1条
16	12	2号整穴住居	二重口縁蓋	144		口縁高37		7.5YR8/4	7.5YR8/4	不明	不明			1・2	甘い	
16	13	2号整穴住居	二重口縁蓋	130		口縁高30		7.5YR8/6	2.5Y7/2	不明	不明			2・3	良好	
16	14	2号整穴住居	二重口縁蓋	124		口縁高28		7.5YR8/4	7.5YR8/4	不明	不明			2・3	良好	
16	15	2号整穴住居	複合口縁蓋	215		口縁高32		5YR1.7/1	5YR7/8	1→2	1→2			2・3	良好	
16	16	2号整穴住居・56+57	直口縁蓋	157		口縁高42		2.5YR7/6	2.5YR7/6	1→2	1+2			1・2・3 精良	良好	頸内径90
17	17	2号整穴住居・61	直口縁蓋	180		口縁高54		5YR7/6	2.5Y6/2	2	2?			1・2	良好	
17	18	2号整穴住居・66	直口縁蓋					7.5YR8/6	2.5YR7/8	1→2?				1・2・3 精良	良好	
17	19	2号整穴住居・115	蓋又は鼓形器台	136		口縁高35		7.5YR8/4	7.5YR8/4	不明	不明			1・2 精良	良好	
17	20	2号整穴住居・616	蓋又は鼓形器台	154		口縁高46		5YR8/4	5YR8/4	2	2			1・2・3	やや甘い	
17	21	2号整穴住居・212	埴	126		口縁高25	123	5YR7/6	5YR7/6	不明	3+1-2?			1・2 精良	良好	
17	22	2号整穴住居・10	埴	124		残存高70	109	2.5YR6/6	2.5YR6/6	2	3+2			1・4	良好	
17	23	2号整穴住居・252	埴	146		残存高45	130	7.5YR7/4	7.5YR7/4	不明	1→2?			1・2・4	良好	
17	24	2号整穴住居	小壺蓋	144		口縁高43		7.5YR6/4	7.5YR6/4	1→2	2			1・2・4 精良	良好	堅緻
17	25	2号整穴住居・9	小壺蓋	128		口縁高49		2.5YR6/4	2.5YR6/4	1→2	1→2			1・2	良好	
17	26	2号整穴住居・543	小壺蓋	120		口縁高48	98	10YR8/4	10YR8/4	4	2+4			1・2・3	良好	胴高47
17	27	2号整穴住居・524	鉢	152		口縁高52	110	2.5YR7/8	2.5YR7/8	不明	不明			精良	良好	
17	28	2号整穴住居・81	鉢	156		口縁高32		7.5YR8/4	7.5YR8/4	1→2	2			1・2・3・4	良好	
17	29	2号整穴住居・54	鉢	156		76		5YR8/4	5YR8/4	3+2	2			1・2・4	良好	
17	30	2号整穴住居	高坏	158		52		5YR7/4-6/3	5YR7/4-6/3	2	2			1・2	良好	
17	31	2号整穴住居・13	高坏	150		坏深30+		5YR6/6	5YR6/6	2	2			1 やや砂質	良好	
17	32	2号整穴住居	高坏	156		残存高35+		5YR5/1-7/6	2.5YR6/8	2	2			1・2・3 砂質	良好	
17	33	2号整穴住居・79	高坏	180		坏深39		5YR7/6	5YR7/6	2	2			1・2・4 精良	良好	
17	34	2号整穴住居・269	高坏脚台		126	残存高16		10YR7/4	10YR7/4	2	1			1・2・4 精良	良好	穿孔
17	35	2号整穴住居	高坏脚台		98	残存高20		2.5YR7/8	2.5YR7/8	1→2	1			1・2 精良	良好	
17	36	2号整穴住居・216	高坏脚台		120	残存高22		2.5YR6/6	2.5YR6/6	2	2			1・3 精良	良好	
17	37	2号整穴住居・5	高坏脚台					2.5YR7/6	2.5YR7/6	4	1→2			1・2・4 精良	良好	3箇所穿孔
17	38	2号整穴住居・14	器台		108	60		10YR7/3	10YR7/3	不明	不明			1・2 精良	良好	2孔一針、3箇所穿孔
17	39	2号整穴住居・8	器台		108	58		2.5YR7/6	2.5YR7/6	不明	不明			精良	やや甘い	4箇所穿孔
18	40	2号整穴住居・69	器台		218	残存高35		7.5YR7/4	2.5YR7/6	1+2?	1			1・2	良好	
18	41	2号整穴住居	器台		140	残存高38		7.5Y4/1	7.5Y4/1	2	1→2			1・2 精良	良好	
18	42	2号整穴住居・721+2 J	鉢or甕脚台					2.5Y6/3	2.5YR6/3	不明	不明			1・2 やや砂質	良好	
18	43	2号整穴住居・15	鉢or甕脚台					7.5YR7/6	7.5YR7/6	不明	不明			1・2・4 精良	良好	
18	44	2号整穴住居・30	鉢or甕脚台	85		残存高50		2.5YR7/3	2.5YR7/3	1→2	1+2			2・4 精良	良好	
18	45	2号整穴住居・158	鉢or甕脚台	98				7.5YR8/6	7.5YR8/8	2	1			精良	良好	
18	46	2号整穴住居・740	鉢or甕脚台	87				7.5YR2/4	2.5YR3/1	1+2	2			1・2・4 精良	良好	

第3表 土器等属性一覧表①

(単位: mm)

棟号	番号	出土位置・取上番号 (+)は接合関係	器種	口径	底径	器高	胴径	色		調整		文様		胎土	焼成	備考	
								外面	内面	外面	内面	外面	内面				
18	47	2号整穴住居・41	手掘ね脚台		52	脚台高10		2.5Y8/3	2.5Y8/3	6	6			精良	やや甘く軟質		
18	48	2号整穴住居	甕					10YR4/2	10YR4/2	7→1	3			1・2・4 精良	良好	49と同一個体	
18	49	2号整穴住居	甕					10YR4/2	10YR4/2	7→1	3			精良	良好	叩き資料	
18	50	2号整穴住居	須恵器・坏蓋	130		45		10YR5/1	10YR5/1	8・3				精良	良好	ロクロ時計回り	
18	51	2号整穴住居	須恵器・坏身	116		40		10YR5/1	10YR5/1	8・3				精良	良好	ロクロ時計回り	
18	52	2号整穴住居・土墩65	陶質系	胴径140		残存高50		5YR4/1	5YR4/1		8	8		精良	良好	割口5YR4/1	
18	53	2号整穴住居	陶質系			68		2.5Y7/4	2.5Y7/4	8・3		8		精良	良好		
18	54	2号整穴住居	青磁碗					10Y5/2	10Y5/2				鍋蓋弁	精良	良好		
22	1	2号土壇	青磁碗	166	50	68		7.5Y6/3	7.5Y6/3				鍋蓋弁	灰色・緻密	良好	高台外、見込み削り	
22	2	2号土壇	土師器皿		80			10YR8/4	10YR8/4					水蒸・精良	良好		
22	3	3号土壇	高坏脚台		85			10YR8/4	10YR8/4	不明	不明			1・2・3 精良	良好	小孔3箇所	
22	4	柱穴20	内黒碗	140				5Y8/1	5Y4/1	不明	不明			精良	良好		
22	5	柱穴45	内黒碗	140				5YR7/4	5YR2/1					1・4 精良	良好		
22	6	柱穴45	土師器皿		40			7.5YR6/6	7.5YR6/6					4・5 精良	良好	底部余切り	
22	7	柱穴45	白磁皿		73			7.5Y7/1	7.5Y7/1					精良	良好	内外貫入	
22	8	柱穴65	陶質系土器					2.5Y5/2	2.5Y6/1				波状文	精良	良好	脚蓋	
22	9	柱穴86	青磁碗高台		56			5Y6/3	5Y6/3					精良	良好	見込み使用痕	
22	10	柱穴86	青磁碗					7.5Y5/3	7.5Y5/3				鍋蓋弁	精良	良好	外面貫入	
22	11	柱穴86	瓦質鉢	260				7.5Y7/2	7.5Y7/2					1・2 精良	良好		
22	12	柱穴88	二重口緑甕	125				2.5Y7/3・6/2	2.5Y7/3					精良	良好・二次被熱	鉄滓付着	
22	13	柱穴151・7+2 J+1 T	青磁碗	155				7.5Y7/2・6/3	7.5Y7/2・6/3				鍋蓋弁	白色・緻密	良好	内外貫入	
22	14	柱穴153	青磁碗					7.5Y6/2	7.5Y6/2				鍋蓋弁	灰白色・緻密	良好		
26	1	柱穴132・15+27+35+36+47	青磁碗	158				7.5Y5/2	7.5Y5/2				鍋蓋弁	灰白色・緻密	良好	内外貫入	
26	2	柱穴132・142+3+6+8+20+21+2 J+2 J	青磁碗	165	48	82		5Y5/3	5Y5/3				鍋蓋弁	灰白色・緻密	良好	内外貫入	
26	3	柱穴132・12+13+20+32+39	青磁碗	168	66	67		2.5GY6/1	2.5GY6/1				鍋蓋弁	灰白色・緻密	良好	内外貫入	
26	4	柱穴132・4+5+7+10+11+43+C2	青磁碗	160				5Y5/4	5Y5/4				鍋蓋弁	灰白色・緻密	良好	内外貫入	
26	5	柱穴132・22+29+56	青磁碗	176				10GY7/1	10GY7/1・3Y5/6				鍋蓋弁	灰色・やや荒い	良好	内外貫入	
26	6	柱穴132・28+38+53+57+58	青磁碗	116				7.5GY7/1	7.5GY7/1				鍋蓋弁	灰白色・緻密	過度	内外貫入	
26	7	柱穴132・63	白磁皿	112				10Y7/1	10Y7/1					灰白色・緻密	良好	口売げ	
26	8	柱穴132・12+34	白磁皿	100	60	19		5GY8/1	5GY8/1					白色・緻密	良好	内外貫入・口売げ	
26	9	柱穴132・14	白磁皿	96				7.5Y7/1	7.5Y7/1					灰白色・緻密	良好	口売げ	
26	10	柱穴132・9	白磁皿	96				7.5Y7/1	7.5Y7/1					灰白色・緻密	良好	口売げ	
26	11	柱穴132・37	白磁皿		54			2.5GY8/1	2.5GY8/1					白色・緻密	良好	口売げ	
26	12	柱穴132・42-63	瓦質鉢	252	110	104		5P7/1	5P7/1					1・5 やや荒い	やや甘い		
27	1	C-3 トレンチ	甕	180		口縁高30		7.5YR7/4	7.5YR7/4	2	3+2?			1・2・3	良好		
27	2	試掘1 トレンチ拡張	壺	138		口縁高50		5YR7/6	5YR7/6	不明	不明			5 やや精良	良好		
27	3	試掘1 トレンチ拡張	小型丸底埴	122		残存高75	75	5YR7/8	5YR7/8	不明	不明			精良	良好		
27	4	B-4 トレンチ	複合口緑壺	187		口縁高26		5YR7/6	5YR7/6	不明	不明			1・2 精良	良好		
27	5	C-3 トレンチ	高坏	160		坏深33		5YR6/8	5YR6/8	1+2	2			1・2 精良	良好		
27	6	B-4 トレンチ	高坏	150		坏深48		5YR7/8	5YR7/8		2	2		精良	良好		
27	7	C-3 トレンチ	高坏脚台					5YR6/6	5YR6/6	4	3			1・2 精良	良好	穿孔	
27	8	C-3 トレンチ	器台		160	残存高31		2.5YR6/4	2.5YR7/6	不明	不明			1・2・3	良好		
27	9	C-4 トレンチ	器台		164	残存高55		7.5YR8/6	5YR7/6	1+2	2			1・2	良好	長形磁かき4-5箇所	
27	10	C-3 トレンチ	把手					10YR8/4	10YR8/4		2	3		1・2・3	良好		
27	11	試掘1 トレンチ	青磁碗	180				5Y6/4	5Y6/4				鍋蓋弁	白色・緻密	良好	内外大きな貫入	
27	12	C-3 トレンチ	青磁碗	162				5Y6/4	5Y6/4				鍋蓋弁	白色・緻密	良好	内外貫入	
27	13	試掘2 トレンチ	青磁碗					7.5Y5/3	7.5Y5/3				鍋蓋弁	灰白色・緻密	良好	内外微細な貫入	
27	14	C-3 トレンチ	青磁碗					5Y6/3	5Y6/3					なし	菱様文	灰白色・緻密	内外大きな貫入
27	15	C-2 トレンチ	青磁碗					7.5Y5/3	7.5Y5/3					なし	菱様文	灰白色・緻密	内外貫入
27	16	表探	白磁皿	126				10Y8/1	10Y8/1					白色・緻密	良好	内面蛇の目割ぎ	
27	17	試掘1 トレンチ拡張	白磁皿	122	42	38		10Y8/1	10Y8/1					白色・緻密	良好	内面蛇の目割ぎ	
27	18	B-4 トレンチ	青白磁小杯		32			明青緑色	明青緑色					白色・緻密	良好		
27	19	B-3 トレンチ	青花皿					10GY8/1	10GY8/1				波状文	白色・緻密	良好	基部底	

1	ハケ
2	ナテ
3	ケズリ
4	ミガキ
5	棒状工具
6	指頭
7	叩き
8	水鏡き

調査手法略記号

1	石英
2	長石
3	黒雲母
4	金雲母
5	角閃石

胎土混入鉱物略記号

第4表 土器等属性一覧表②

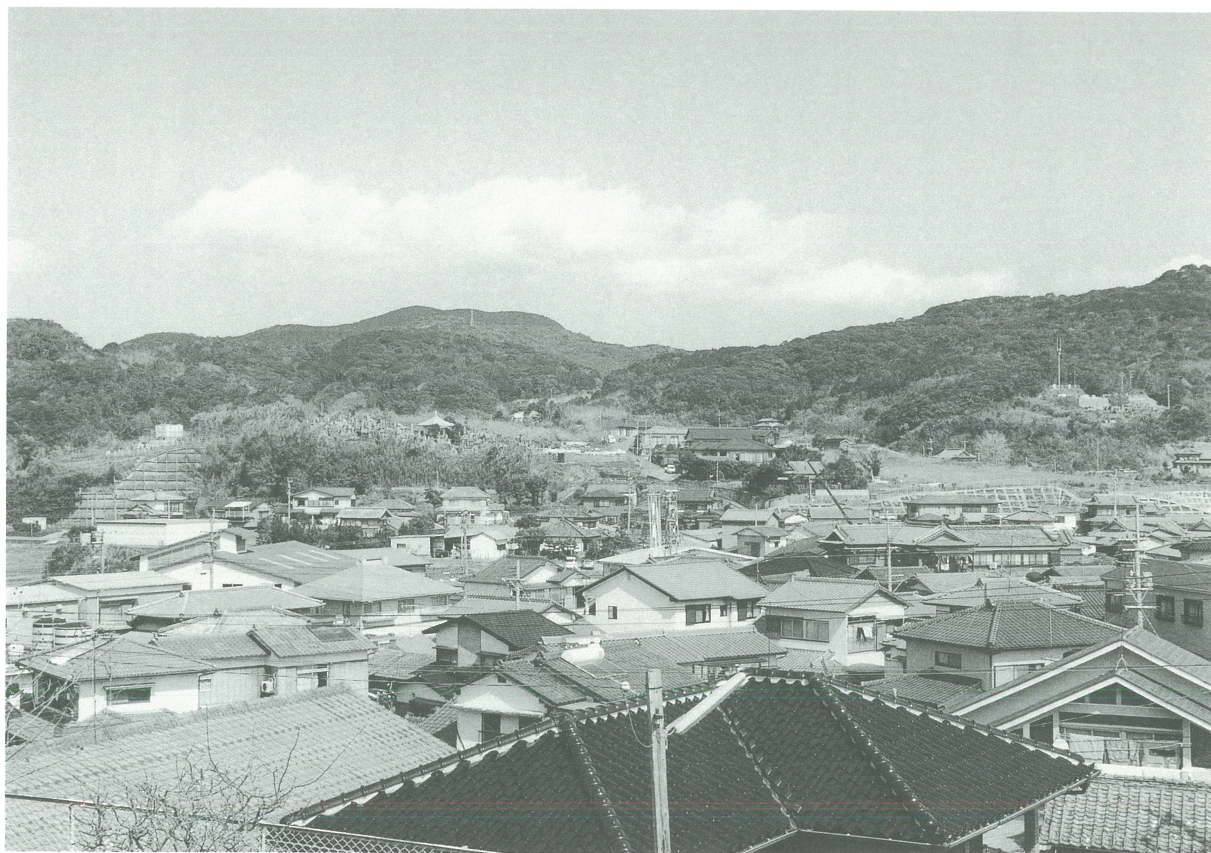
柱穴番号	弥生(要など)	弥生~土師器	韓半島系?	須恵器	土師・瓦質等	土師・瓦質等	青磁・白磁	滑石製品	黒曜石	鉄 滓	焼結粘土	砥 石	石 材	その他	
2									1						
3		6													
8		3									1				
9		11				1									土師皿
10		4													
11		4													
12		1													口縁近く
13	2	4													
14	3														
17		6													
18		17													
19		1													
20		1			1										
21		5				3									
22		4													
23	2	10													突帯部分あり
24		1													
25		25													
26		7													
27		8									1		円礫		
28		7													
29		6							鉄片						
30		50				2		1							異形丹塗りあり
31		10													
32		2													
33		18													
37		5													
38		16				1									土師皿
40															
41		10													
42		7													
43		17				1							現代		内黒。丹塗り突帯あり
45		15			1	4	1	1							石鏃 糸きり底あり
46		44							1						
47		6													
48		1													
50		10								1					鉄滓
51		2													
52		46						1	1	2		1	石斧		鉄滓
54		5													
55		3													
56		34									1	1	円礫		叩き石
57		2													
58		25													
59		24			1										須恵器灰白色
60		49													
62		12													
63		19													
65		62		1									小円礫		櫛描波状文あり
66		4		1											
67	2	34						3					円礫		逆し字形口縁あり
68		48													
69		7													
70		23							2	1			石斧?		
74		41													
75		33													
76		46							1						石鏃
77		48							1				石英円礫	砥石	
78	1	15													袋状口縁・丹塗り
79		12													
80		6													
81		7							1						
82		13													
85		7													
86		34				3	2						石英円礫		須恵器鉢口縁
87		3													
88		37								1					鉄滓付着土師口縁
89	1	7													2条突帯
90		5											円礫		弥生
93	1	12													丹塗り口縁

第5表 遺物出土柱穴一覧表①

柱穴番号	弥生(寛心)	弥生-土師器	磯半島系?	須恵器	土師・瓦質等	土師・瓦質等	青磁・白磁	滑石製品	黒曜石	砥 滓	焼締粘土	紙 石	石 材	その他
94	1	66								1	9		軽石	砥滓付着土師 丹塗りあり
95		59									3			
96		16									6			
97	1	23												逆し字形口縁
98		4												逆し字形口縁
99	1	40												
100		4												
101		32												
102		6									11			
103		23							1				純紋岩 砂岩	
104		6												
105		13												
106		15												
108		13												
109		2												
110		3							2		1		変成岩 砂岩	
111	4	17												
112		20												
113		20									5			
114	1	11									7		小円礫	
115		6									5			
116		10									4			
117		11									1			
118		7												
119		1												
121		6												
122		1												
123		11												
124		22												
125		8				1								土師皿口縁
127		1												
128		43							1				石英 円礫	
129		32			3		1							
130		55			1						1			
131	1	17												
132		34					63	1						滑石製容器
133		49						1	1		1			
134		1												
135	1	71												
136	1	14											*x8付 軽石	
137	10	10												
138	1	3												
139		3											磨石	台か 丹塗りあり
140		11									3			
141		1												
142	1	5												
143		10												
144		16												
145	1	2												
146		11												
147		7									1			
148		18				1					1			
150		3												
151	3	58					1			1			円礫・結片	弥生中丹塗り2点
153		31				2	1	1	1	1			円礫	滑石製品・柄付容器
157		3												
158	4	9							1					
159		5												
160		64				3			1				石英 割り石	
161		111								1	1	1	緑泥岩 炭化木の実	
162		17											砂岩	
	5	T												
p 1		6												
p 2		18								1				
p 3	3	9											砂岩	
p 4		17												
p 5		20					1							
p 6	2	44									7			

第6表 遺物出土柱穴一覧表②

圖 版



1. 有喜・上原遺跡遠景（南西より）



2. 有喜・上原遺跡近景（南西より）



1. 試掘5トレンチ遺構検出状況（南より）



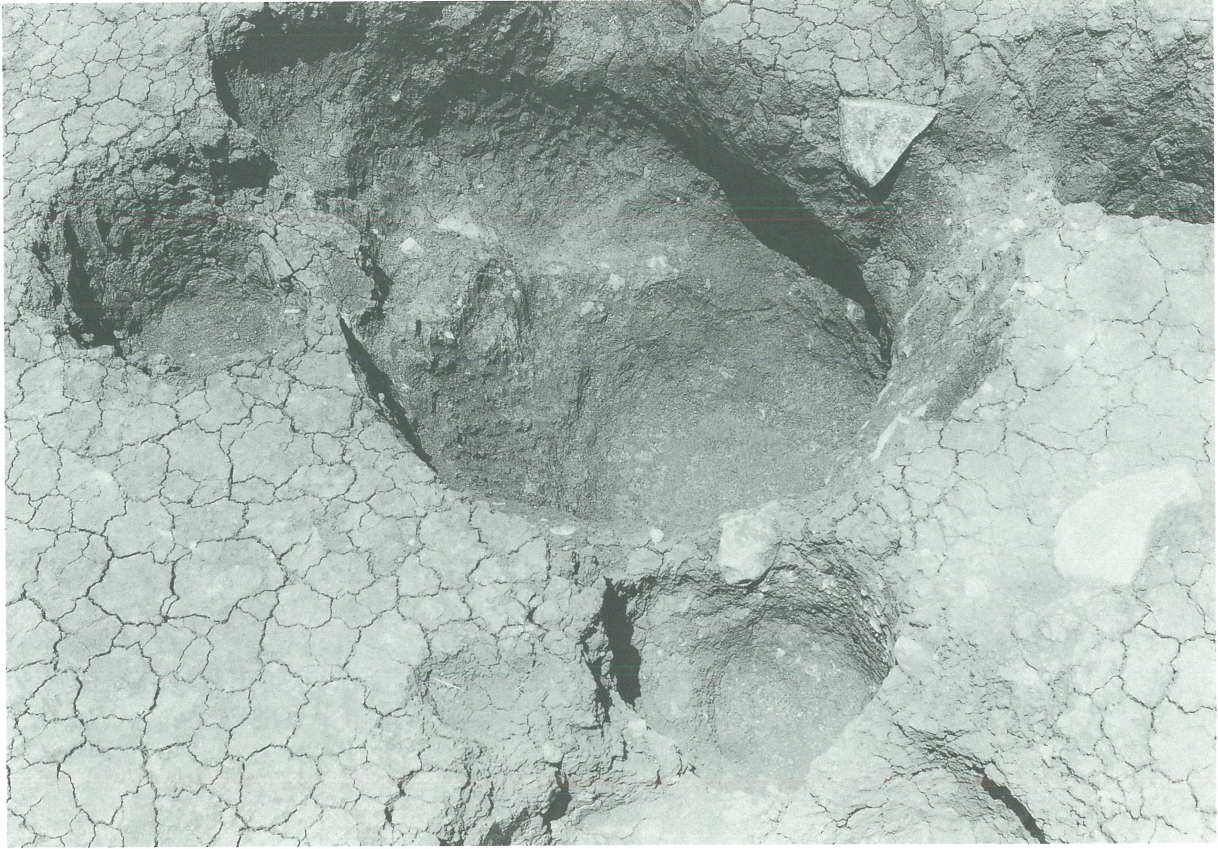
2. 1号甕棺墓（南より）



1. 2号甕棺墓 (南より)



2. 3号甕棺墓 (南より)



1. 3号甕棺墓掘方（南より）



2. 調査区全景（1・2号竪穴住居跡）（東より）



1. 1号竪穴住居跡（南より）



2. 2号竪穴住居跡（南より）



1. 2号竖穴住居跡遺物出土状況（北より）



2. 2号竖穴住居跡土層堆積状況（東より）



1. 1号土壙 (南より)



2. 2号土壙 (青磁出土状況) (東より)



1. 2号土壙 墓石(?) (第22図15) 検出状況 (南西より)



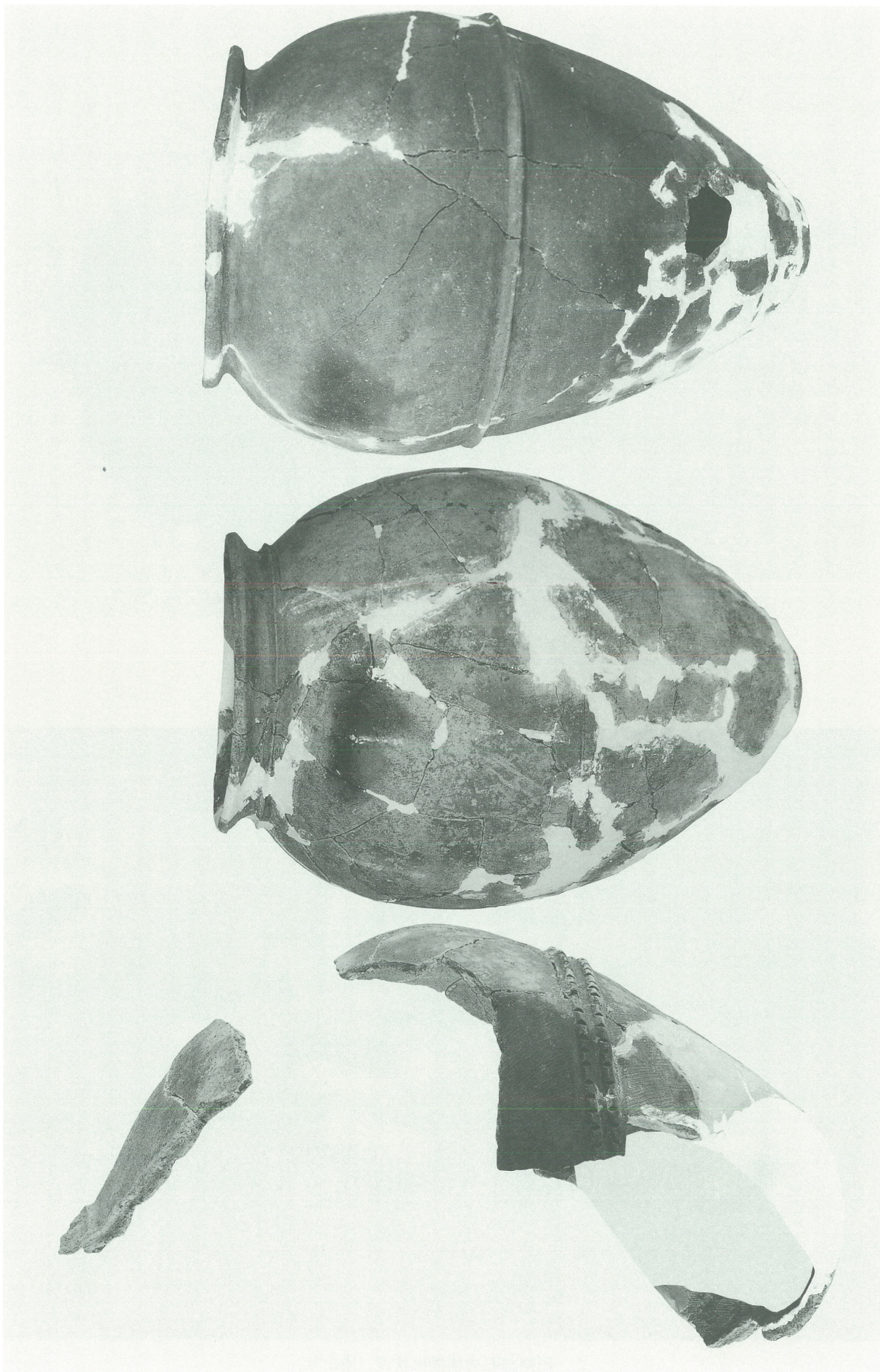
2. 2号土壙完掘状況 (壙底は柱穴163) (南より)



1. 3号土壙半掘状況（西より）



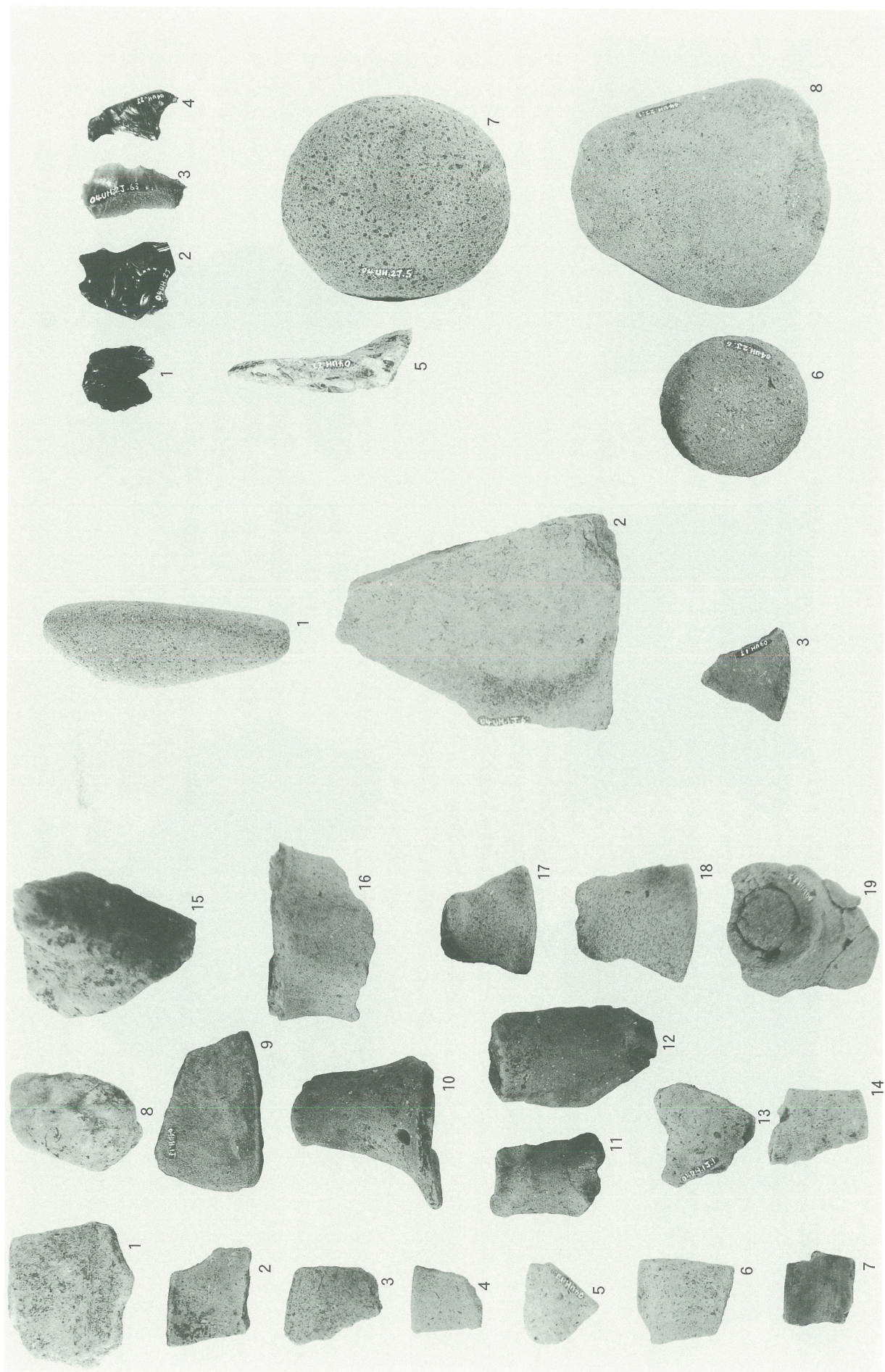
2. 円礫集石遺構検出状況（南より）



1. 1号甕棺

2. 2号甕棺

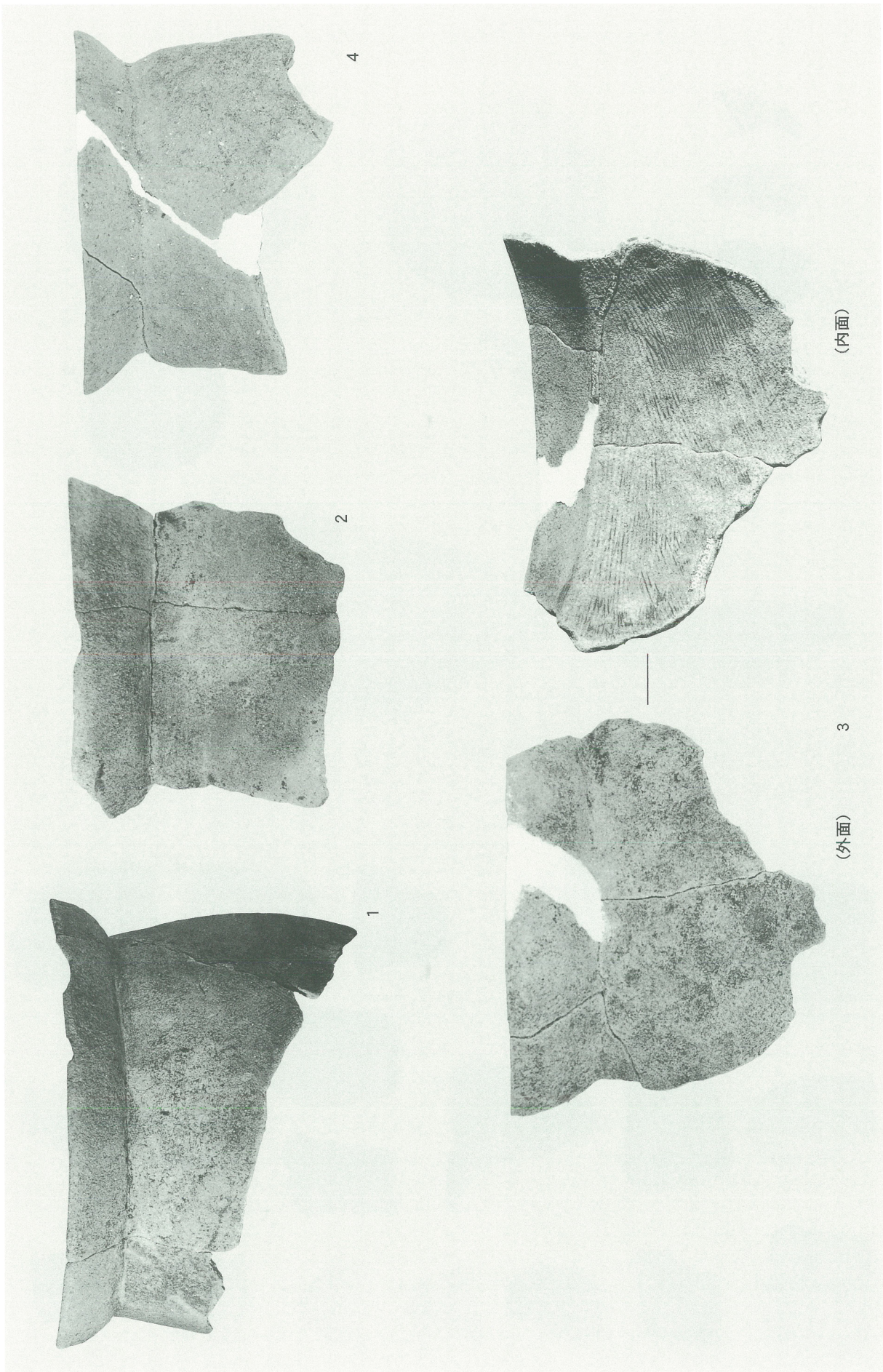
3. 3号甕棺



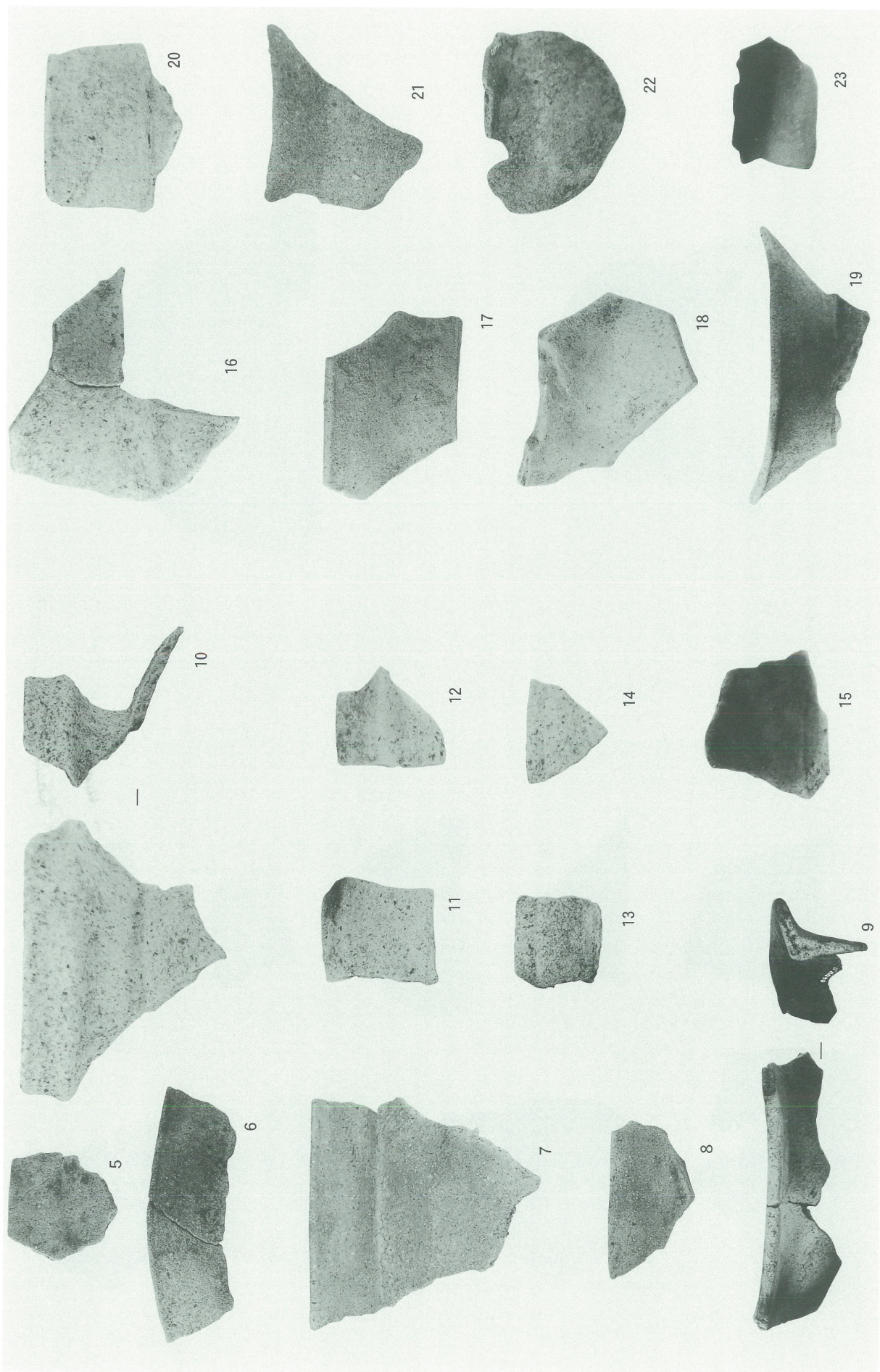
3. 2号竖穴住居跡出土石器 (1~8)

2. 1号竖穴住居跡出土石器 (1~3)

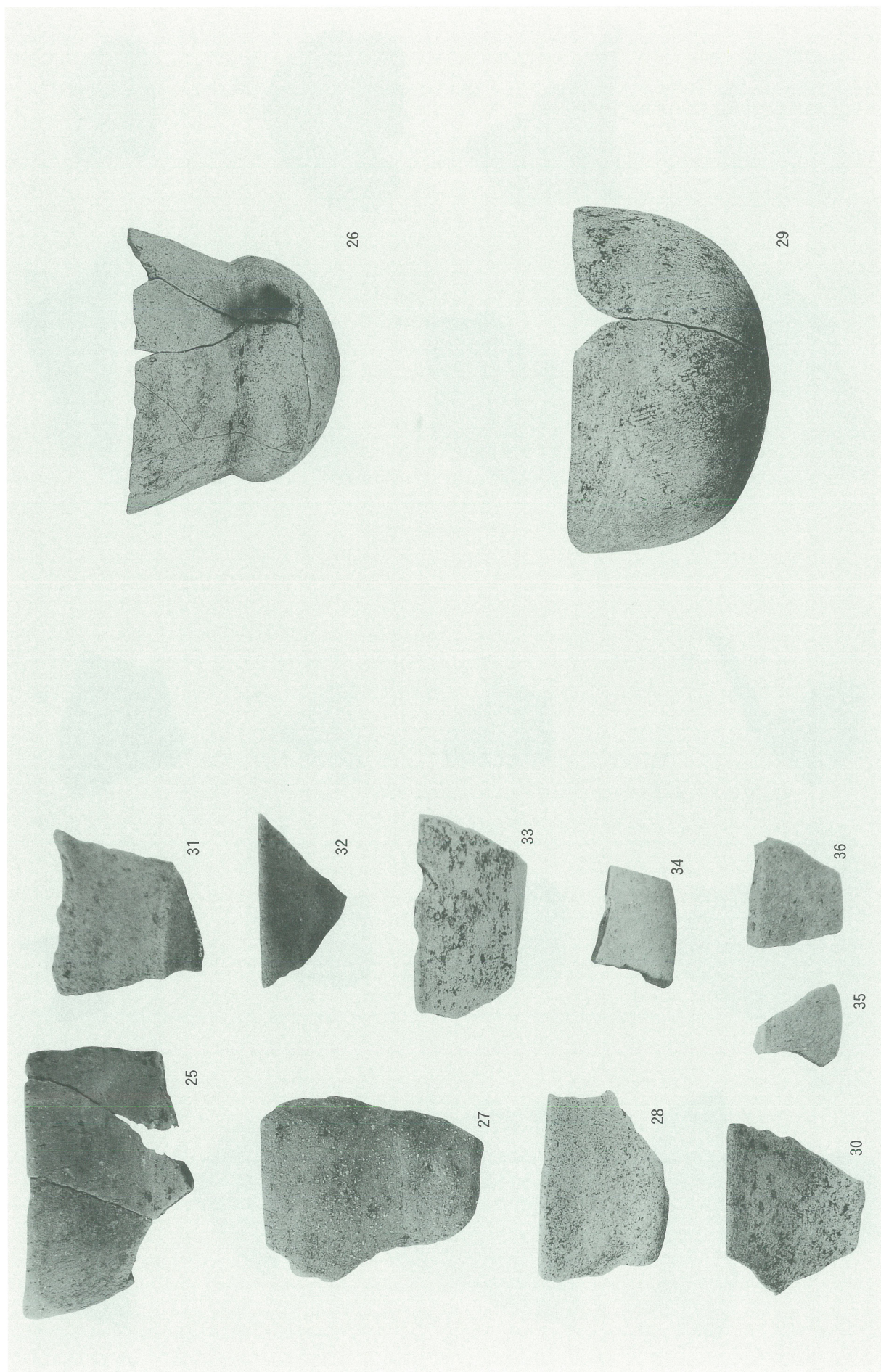
1. 1号竖穴住居跡出土石器 (1~19)



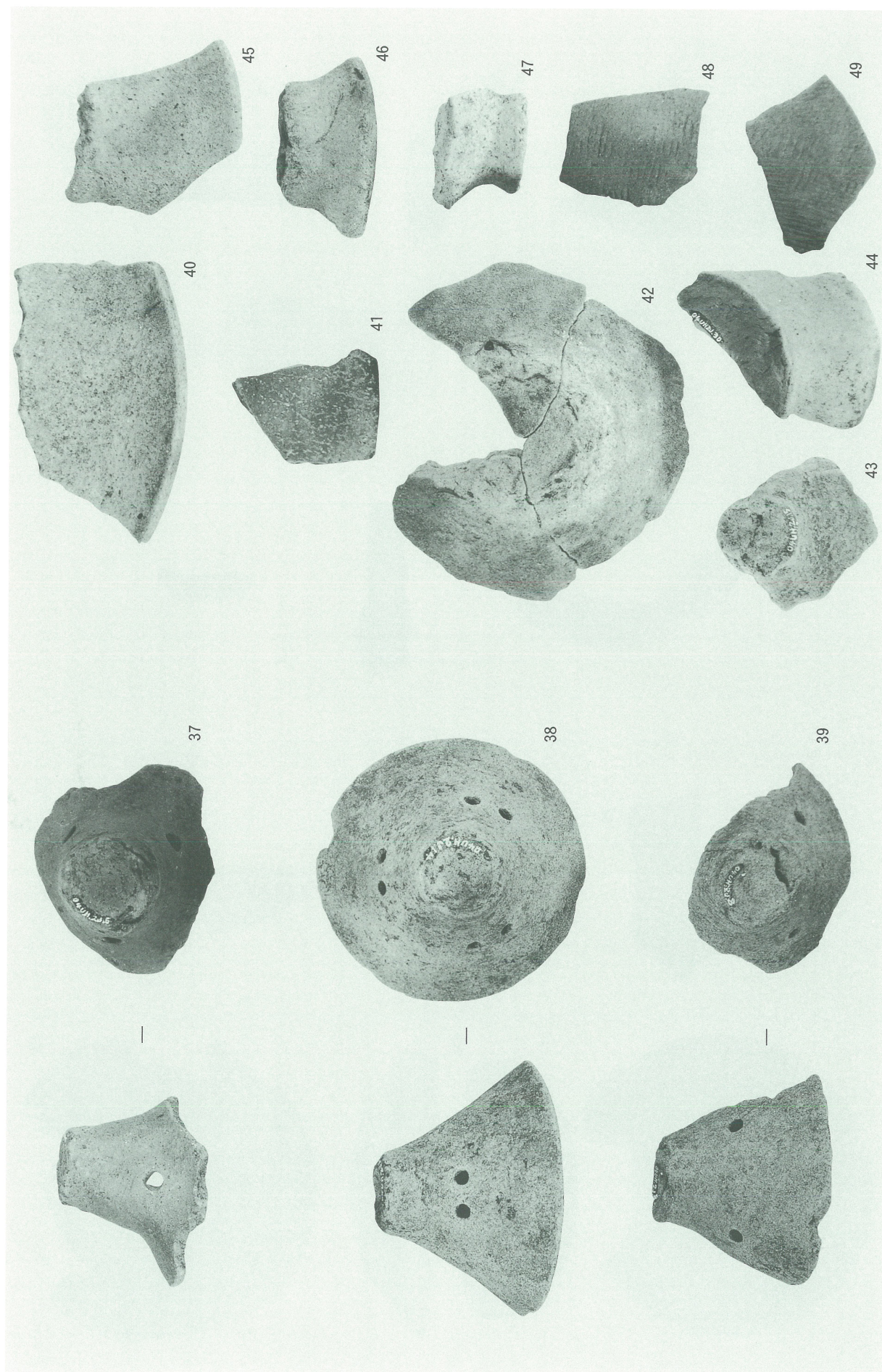
2号竖穴住居跡出土土器(1~4)



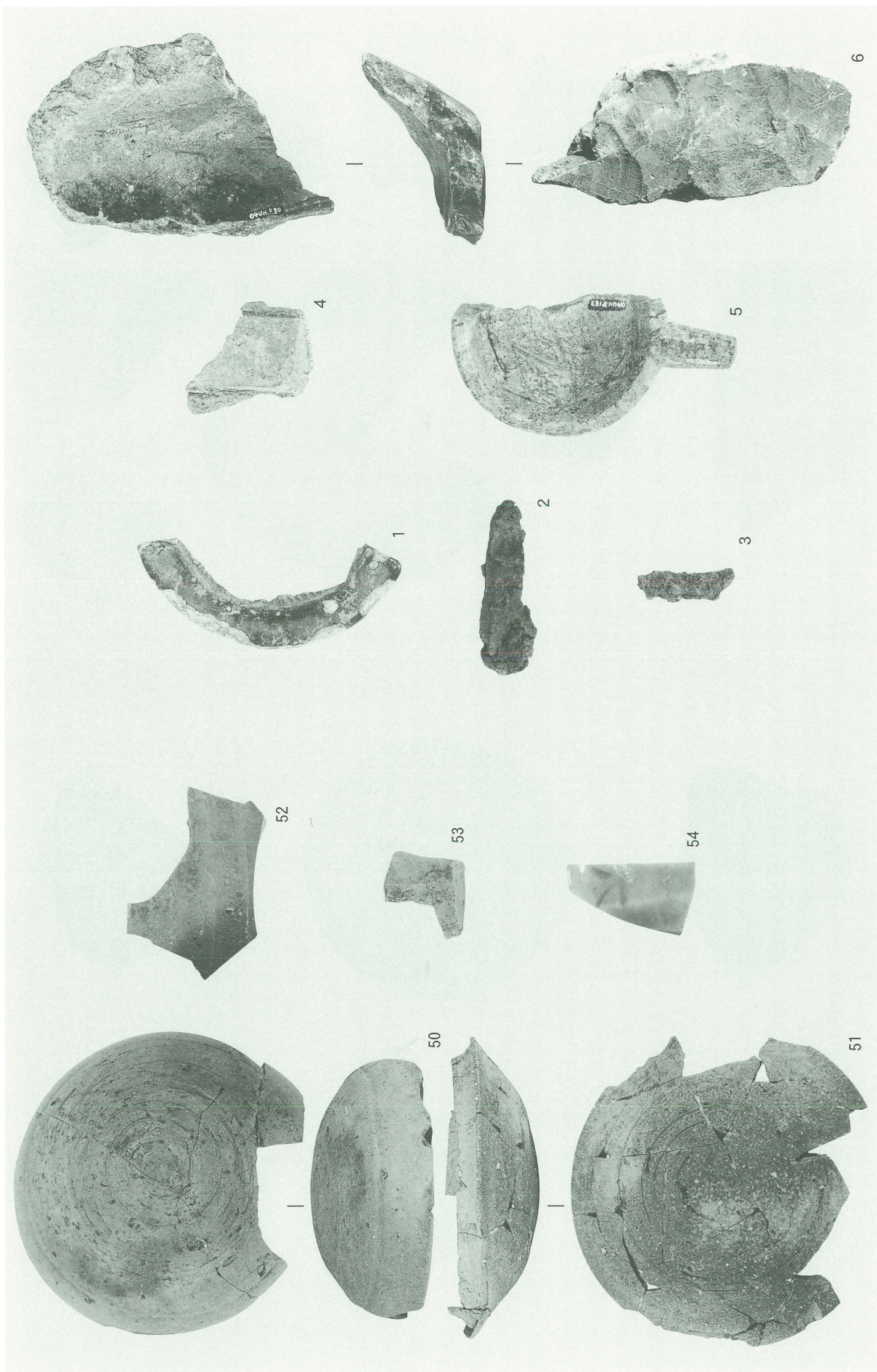
2号竖穴住居跡出土土器 (5~23)



2号竖穴住居跡出土土器 (25~36)

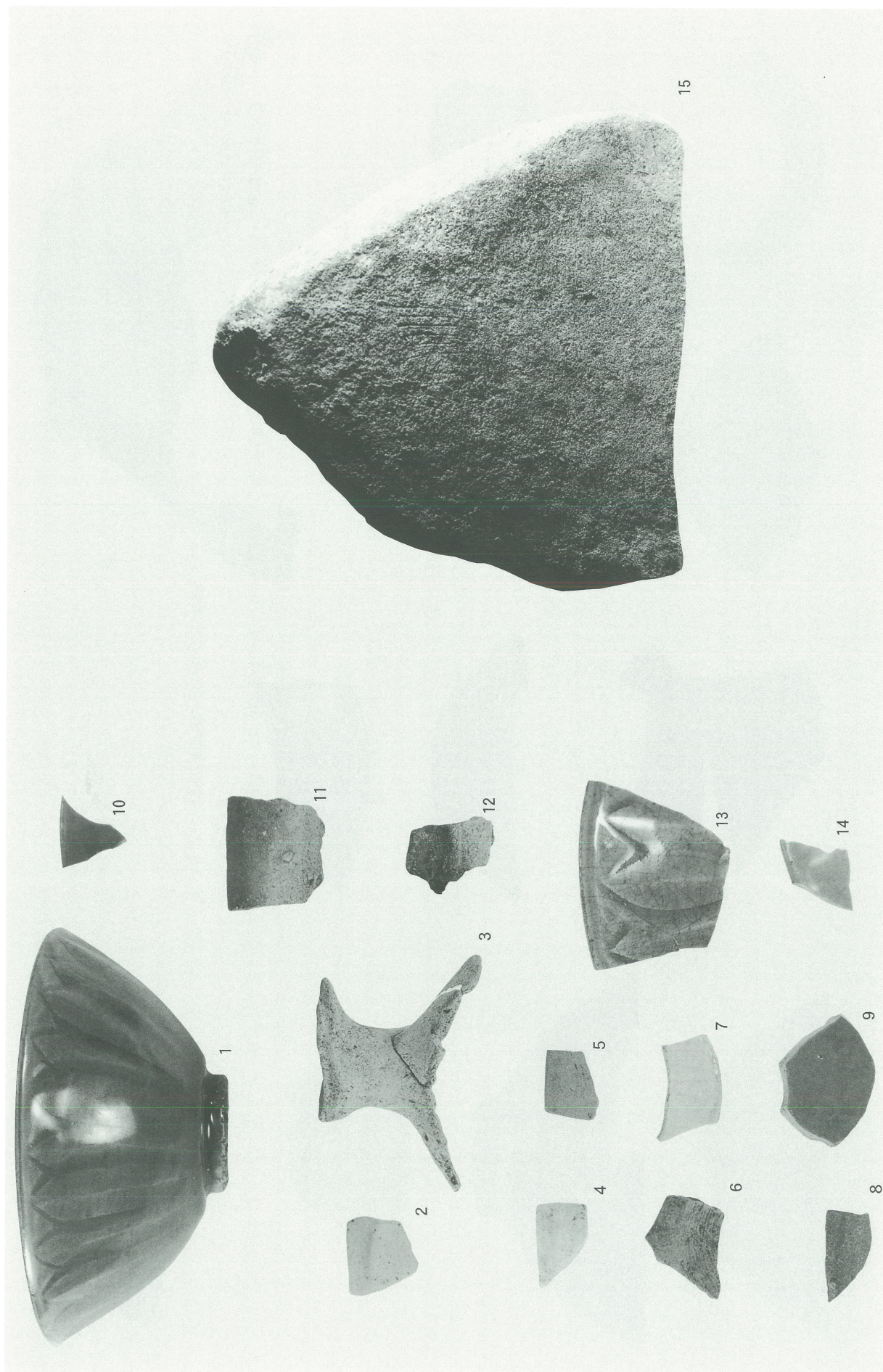


2号罌穴住居跡出土土器 (37~49)

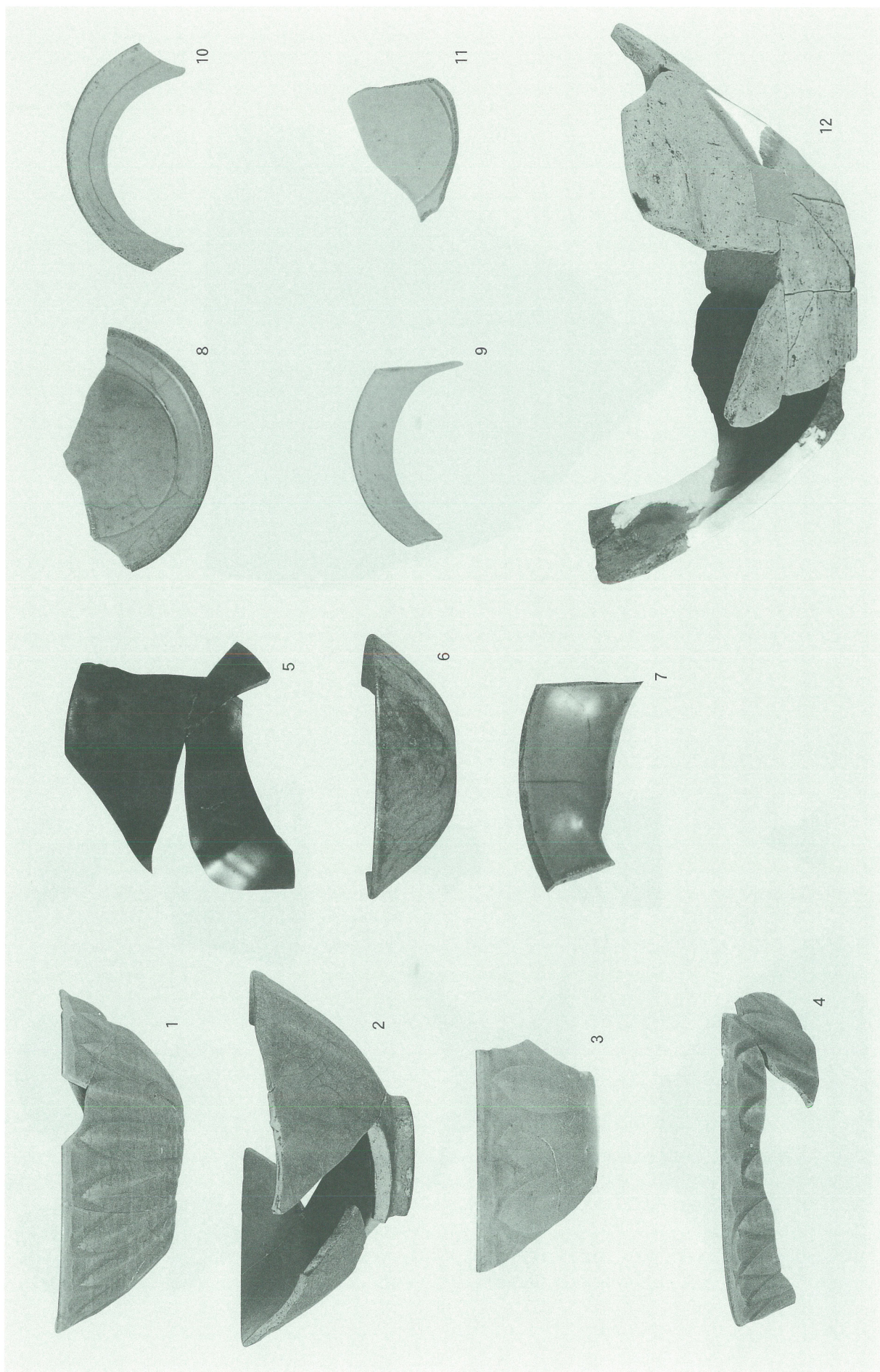


2. 2号竪穴住居跡ほか出土遺跡 (1~6)

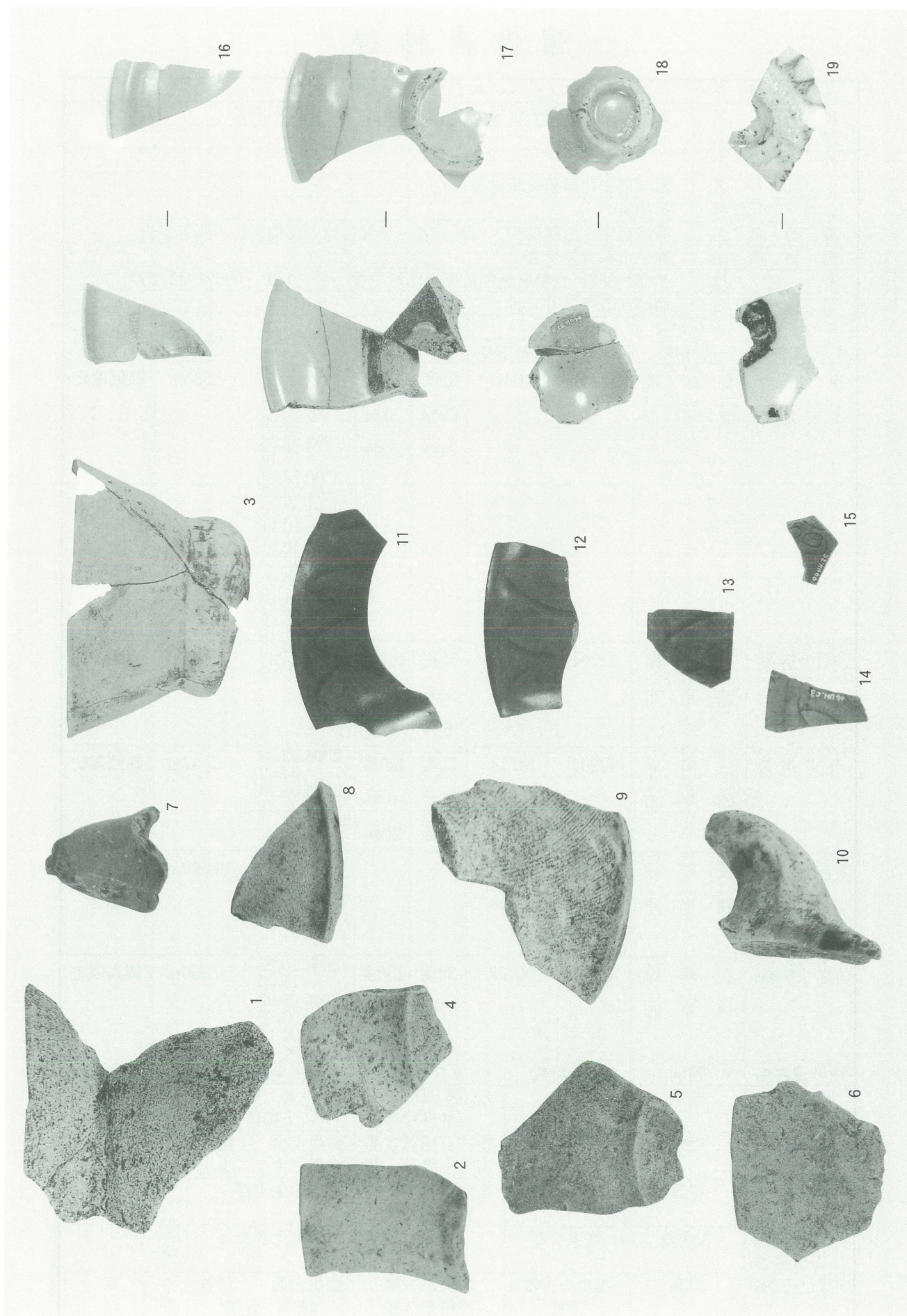
1. 2号竪穴住居跡出土遺物 (50~54)



1. 土壙、柱穴出土遺物 (1~15)



1. 柱穴132出土遺物 (1~12)



1. その他の出土遺物 (1~19)

報告書抄録

ふりがな	いさはやしぶんかざいちょうさねんぼういち							
書名	諫早市文化財調査年報Ⅰ（平成9年度～平成17年度）							
副書名								
巻次								
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	秀島貞康・川瀬雄一・古賀 力・分部哲秋・佐伯和信・岡本圭史							
編集機関	諫早市教育委員会							
所在地	〒854-8601 長崎県諫早市東小路町7番1号 TEL (0957) 22-1500							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
風観岳 支石墓群	長崎県 諫早市	42204	84-20	32度 53分 21秒	130度 0分 52秒	1997.08.06 ～10.08 1998.08.17 ～10.29 1999.07.28 ～10.15 2000.12.04 ～01.02.27 2001.07.10 ～10.11 2002.10.01 ～12.25 2003.09.09 ～04.01.15 2004.07.26 ～11.10	2,886m ²	範囲確認
溝口遺跡	長崎県 諫早市	42204	85-13	32度 54分 6秒	130度 9分 1秒	2005.09.20 ～10.28	80m ²	範囲確認
滑川遺跡	長崎県 諫早市	42204	84-14	32度 50分 4秒	130度 0分 20秒	2006.02.20 ～03.20 2006.05.22 ～05.31	47m ²	範囲確認
有喜・上原遺跡 ほか27遺跡	長崎県 諫早市	42204	90-38 ほか				16,890m ²	個人住宅 など
有喜・上原遺跡	長崎県 諫早市	42204	90-38	32度 47分 40秒	130度 5分 15秒	2004.10.27 ～11.02 2006.03.02 ～03.30 2005.04.11 ～06.10	250m ²	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
風観岳 支石墓群	墳墓	縄文	支石墓100基+ α 石材供給地	縄文土器・弥生土器 土師器		6群から構成される		
溝口遺跡	墳墓	弥生・古墳	箱式石棺墓3基 石蓋土壇墓1基	弥生土器・土師器 鉄鏃・ガラス小玉		人骨残存		
滑川遺跡	墳墓	弥生	箱式石棺墓4基 甕棺墓2基	弥生土器				
有喜・上原遺跡 ほか27遺跡	包含地	弥生など		弥生土器など				
有喜・上原遺跡	墳墓	弥生・古墳 中世	住居跡2棟 甕棺墓3基	弥生土器・土師器 鏡片・青磁				

諫早市文化財調査報告書 第20集

諫早市文化財調査年報 I

(平成9年度～平成17年度)

2007. 3. 31

発行所 諫早市教育委員会
諫早市東小路町7番1号

印刷所 諫早印刷株式会社
諫早市福田町20番26号